

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

スーパーグレイトウォーズ 大いなる戦士達

### 【作者名】

一芽

### 【あらすじ】

限りなく似ていて、限りなく違う二つの世界、片方は地球外からの敵や世界征服を狙う者によって人類が追いつめられた世界、もう片方は地球外からの敵や怪獣が現れても人類が勝利してきた世界、交わるはずのない二つの世界の戦士達が出逢うとき大いなる戦いが始まる……。

この小説はpixivにも投稿しています。

## プロローグ ぶつかり合う絶望

宇宙戦歴 年 月 日

俺は今、とある国の戦場にいる。本当なら俺の親友が奴らを一掃して終わるはずだった。

日本帝国の戦術機『撃震』を操縦する俺『白銀武』の目の前には地獄が広がっていた。

青年「くそっ、どうしてこうなったんだ！あいつに何があっただんだ！」

俺達の地球は火星・月から襲来した化け物『BETA』によって滅茶苦茶にされた。そんなBETAから人類が生き延びるために発動した『オルタネイティブ計画』は、最終段階である『オルタネイティブ』が発動してて数億人の中から選ばれた十数万人の人々がバーナード星系へと旅立ち地上に残された人類の『バビロン作戦』も最終段階に突入し、大量のG弾を用いて大多数のBETAを殲滅した。そして地球に残る人類は、生き残ったBETAとの戦いを繰り返していった。俺達には強い味方がいた、光子力エネルギーで動く黒鉄の城『マジンガーZ』だ。

マジンガーZの操縦者の『兜甲児』は俺の親友でとても頼りがいのある男で、恋人の『弓さやか』と共に戦場を駆け抜け、生き残ることを諦めかけた俺達に希望を与えてくれた。

……………だが、俺達の希望には、全てを絶望へと叩き落とす  
恐るべき力が眠っていたんだ。

甲児「どこだ、どこだ!!俺の敵はどこだああああああ!!!」

俺の目の前には悪魔のような姿に変わり果てたマジンガーZと、マ  
ジンガーZに眠っていた破壊の力『マジンパワー』に飲み込まれて暴  
走する甲児の姿があった。

武「目を覚ませ甲児!お前はそんな力で暴走する人間じゃないだろ  
!」

甲児「ぐっ、ぐがあああ!」

マジンパワーによって暴走する甲児には、俺の声は聞こえなかつ  
た。

????「武さん無事ですか!」

光子の翼を生やしたアンドロイド『ミネルバX』が、俺の激震の前  
に現れた。

武「おいミネルバ!どうしてあいつはマジンパワーを発動させたん  
だ!」

唯一マジンパワーについて知っていたミネルバに、俺は落ち着きを  
なくした状態で、ミネルバに甲児の身に起こっていることについて聞  
いた。

ミネルバ「甲児さんは、目の前で『さやか』を殺されて、マジンパワー

が暴走してしまい、マジンガーZに取り込まれているんです」

甲児の恋人の弓さやかはBETAの偵察をしていた。だが、BETAと遭遇してしまった。俺達はすぐに助けに行ったが、そこにあつたのは無惨に破壊されたさやかのアフロダイAの姿だった。生体反応も無く、我を忘れた甲児はBETAに突撃。BETAを全滅させるも、そこにいたのはマジンパワーを発動させ、全てを破壊しようとする悪魔と化したマジンガーとそれに飲み込まれる甲児の姿だった。

武「じゃあ突撃したときにはもう……、でもそんなことがあるのか  
」！  
」

ミネルバ「いえ、今までの世界でも、甲児さんがマジンパワーの暴走に巻き込まれる事は何度もありました」

ミネルバは、過去に何度も世界をやり直している、そんな彼女だからマジンガーや甲児について詳しく、俺と甲児にマジンパワーについて教えてくれたんだ。

ミネルバ「彼はもう元の兜甲児には戻れないでしょう、それにマジンパワーによって、彼らまで目覚めてしまった」

武「くそっ、奴らか……」

マジンパワーは、地球そのものに影響を与えた。そして奴らが目覚めた。

ゴジラ「ゴアアアアアアア!!」

大地を揺るがすほどの雄叫びを上げながら、破壊の限りを尽くす怪獣の王『ゴジラ』そして……。

ゲッタードラゴン』……………」

不完全な状態で目覚め、ただ暴走している巨大ロボット『ゲッタードラゴン』。奴らは元々、長い眠りにしていたのだが、マジンパワーの影響によって目覚めてしまい、ゴジラの場合は全てを破壊の対象として、ゲッタードラゴンの場合は不完全な状態だったらしく、バランスの悪いボディで動き回り、ドラゴンから放たれる異常なまでのゲッター線によって、たくさんの人々がゲッターに飲み込まれていった。

甲児「なんだてめえら、俺に殺されてえのか!？」

ゴジラ「ゴルアアアアア!!」

ゲッタードラゴン』……………」

遂に、出会ってはいけない三つの存在が戦いを始めた。

武「どつすればいいんだミネルバ!このままじゃ地球そのものが崩壊するぞ!」

ミネルバ』……………」武さん、もう諦めましょう」

俺の機体の下にいるミネルバはそう告げた。俺はその意味が分かっていた。だから危険を承知で激震を降りて、ミネルバに詰め寄った。

武「ふざけんなよ!何でここまで来て諦めなきゃいけないんだ!」

俺も分かっていた。もう諦めるしかないって。でも、もし俺達がこので逃げたら、死んでいった多くの戦友達に会わせる顔がないんだ!

ミネルバ「すいません武さん、あなたの気持ちは分かります。  
……………でも、ここで死んだらあなたはどうするんですか!?  
あなたは元の世界に帰りたくないんですか!」

武「……………」

俺はミネルバの発言に対して、何も言い返せなかった。だって彼女の言っていることは正しいからだ。俺はこの世界の人間じゃない、他の世界の人間だ、そこには俺の大切な人達がいる、俺はその世界に帰るために、ここまでがんばってきたんだ。

ゴジラ「グルオオオオオ！」

ゴジラの口から放たれた放射熱線が、俺の激震へと放たれる。

武「しまった!」

ミネルバが俺を持ち上げて、フォトンスクランダーで上空へと上がること、なんとかゴジラの放射熱線を避けたが、俺の撃震は跡形もなく消滅していた。

武「くそっ、ゴジラの奴め」

ミネルバ「武さん!とてつもないエネルギー量を持つ巨大生物がこちらに向かっていきます!」

武「なにっ!?!今度は何だよ!」

俺の予想では、そいつは巨大怪獣だとすぐに予想が付いた。そして、その巨大生物らしき物体が上空から姿を現した。そう奴は

.....。

ガメラ「グルアアアアアア!!」

地球の守護神と呼ばれる伝説の怪獣『ガメラ』だ、地球に仇なす者としてマジンガー達と戦いに来たのだろう。

甲児「てめえも俺に殺されたようだな！ならば死ね！光子力  
ビイイイイイイム!!」

マジンガーの両眼から光子カビームが放たれる。

ガメラ「グルアツ！」

ガメラもプラズマ火球と呼ばれる技で応戦する。

甲児「俺を見下すんじゃねえ！この怪獣野郎があああああ!!」

マジンガーの背中中のスクランダーが巨大なZの形をした翼へと変貌し、上空へと上がりガメラを睨みつける。

甲児「これがマジンパワー『変態』か!?!.....やめてくれ甲児！お前は正義の味方なんだろ！悪魔になんかなっちゃ駄目だ！」

甲児「消えろおおお!!」

ガメラ「ガアアアアア!!」

マジンガー大回転するロケットパンチとガメラのバニシング・フィストがぶつかり合う。

その衝撃で空は割れ大地が裂ける。

武「うわああああ!!」

吹き飛ばされる武をミネルバがなんとか支える。

ミネルバ「武さん！彼らがカメラに意識を向けている間に私達は逃げましょうー!」

武「逃げるって言うてるけど、そもそもどこに逃げるんだよー!」  
するとミネルバは、目に涙を浮かべながら言った。

ミネルバ「さようなら武さん、今度こそ世界を守ってください」

武「えっ？ミネルバ、それはどういっ……」

ミネルバ「ルストハリケーン」

武「ミネルバなにを!」

ミネルバの口から放たれたルストハリケーンが、俺を包む。……あれ、……俺の……意識が……す……か……こう……。

ミネルバ「ごめんなさい武さん、私にはこつするしかなかった。」

私のルストハリケーンによって光子へと変換された武さんの姿はもうなかった。



ガメラ「ガアアアアアアア!!」

ゴジラ「ゴアアアアアアア!!」

ゲッタードラゴン「……………」。

兜甲児「てめえらまとめてぶっ殺してやるよ!!」

私の目の前で四つの力がぶつかり合う。大地を削り、山を砕き、ただ戦いあう。

ミネルバ「……………」さん

私は、武さんの愛した さんの名前を呟く。私は知っていた、彼女のお腹には武さんとの子どもが宿っていたことを。でも彼女は、武さんには言わないでほしいと言った。自分の子どもに会えない苦しみをあわせたくなかったからだ。

ミネルバX「さん、どうかご無事でいてください、次の世界でまた会いましょう」

私は さんの無事を祈りながら、世界の終わりを目に焼き付ける。

ミネルバ「今度こそは絶対に世界を救いましょう」

四つの力がぶつかり合う中で、私はこの世界から姿を消した。

……この時、ミネルバは知らなかった。次の世界で起きる、  
今まで以上の壮絶な戦いの始まりを……。

## 第一話 銃使いと異世界の青年と桃色の騎士

宇宙戦歴43年4月12日 日本 山口県

日本の山口県にあるとある町、かつては多くの人々が住んでいたこの町は、昔の面影はなく、破壊の爪痕しか残されていない。そんな町の中を歩く男がいた。

男「……つたく、食料を探しに来たら、人っ子一人いやしねえじゃねえか」

この男の風貌は変わっている。ボロボロのカウボーイ・ハットを頭にかぶり、全身を覆い隠すほどの茶色のコートを身に纏っている。そして、一番目を引くのは、男が背中に背負っている大型の銃であろう。銃身は長く、銃口も子どももの拳程度ある。こんな銃を扱える人間はまずいないが、この銃を持つこの男はいったい何者なのか？

場所は変わって……。

砂浜を歩く一人の青年がいた。青年は黒いジャケットを身に纏い、青いジーンズを履いていて、背中に大きなリュックサックを背負っている。額には赤い布が巻かれており、歩くたびに肩まで伸びた緑がかった黒髪が尾の様に揺れている。

青年「ここはいったいどこなんだ？」

青年は自分のいる場所が分からず、気が付いたら、この砂浜に倒れていた。

青年「しょうがない、人を探るか」

青年は二十分程砂浜を歩くと川を見つけ、上流へと向かい、そこで水を確保した。

それから一時間程歩くと、滅茶苦茶に破壊された町を見つけた。青年は町の中に入り、進んでいく。

青年「いつたい、何があったんだ？……………ん？」

ふと青年は、道の真ん中に変な格好をした男が倒れているのに気が付いた。

青年「おーい！大丈夫ですか！」

青年は、慌てて男に駆け寄る。

青年「変な格好だけど、死んでるのかな？」

男は茶色のカウボーイ・ハットとコートを身につけていて、背中には大型の銃を背負っている。

男「おい坊主、勝手に殺すな」

青年「うわっ！」

男が急に目を開けて、青年は驚いた。そりゃあそうだ、死んでる様に見える、変な男が急に目を覚ましたんだから。

男「驚くことはねえだろ、それより坊主、水を持ってないか？」

青年はこの男が倒れていた原因は、単なる水不足だとすぐに気が付き、先ほど、川で確保した水の入った、2リットルのペッドボトルを男に渡す。

男「おつ、すまねえな」

男はすごい勢いで水を飲み干した。

青年「相当喉が渴いていたんですね」

男「いやあ、一日近く飲んだり、食ったりしてないからな」

青年「はあ…、そうですね、そういえばここはどこだか分かりますか？」

男は不思議そうな顔をする。青年は何か変なことを言ったのだらうかと思った。

男「おいおい、ここは日本の山口県だろ、日本人なのにそんなことが分からないのか？」

青年「えっ？」

一瞬、青年の思考が停止した。なぜなら、青年の知っている日本の山口県には、こんなゴーストタウンはないのだから。その様子を見ていた男は、青年が困惑している原因に気が付いた。

男「はあ、そうかお前、別世界の日本から来たんだな」

青年「!？」

青年は、男が言うことが理解できなかった。

男「まあ最近多くてな、突然、空や海に穴が開いたと思ったら、そこから見たこともない人型兵器や化け物が現れたって話がさ」

青年「じゃあ僕はそこから、来たのですか!？」

男「本人に分からないことが俺に分かるわけねえだろ」

青年「……………すみません」

男「とりあえず名前を教えてくださいよ、俺の名は『グラド』、見ての通りの銃使いさ、そしてこのでかい銃の名は『レッドスピア』だ、何で銃なのに赤い槍って名前なのは、突っ込まないでくれ」

青年「僕の名前は、……………」

青年は、暗い顔で自分の名前を言おうとしない。

グラド「どうしたんだ坊主、自分の名前が分からないのか？」

すると、青年はグラドの目を見て言った。

青年「……………僕、名前が無いんです」

グラド「ハッ!?名前が無い!?お前、どうやって生きてきたんだ!？」

青年「僕は小さいとき、父さんからずっと、お前とか坊主とかしか

呼ばれてないし、父さんが死んだ後は、ずっと独りだったんで……」

グラド「……………なんかすまねえな、そんな事聞いて」

父親を亡くしてから、ずっと独りだったという青年の話を聞いたグラドは、その話をさせたことに対して謝った。

青年「でも、名前が無いって結構大変ですよね」

青年は、今まで気にならなかった自分の名前に関して、急に気になりだした。

グラド「まあ、そんな暗い顔すんなよ、俺がなんとかするからさ、とりあえず、生きた人間を探しに行こうぜ」

青年「そうですね」

共に行動する事になった二人は、横浜へ向かうため、旧米国軍基地を目指した。

旧米国軍基地のある岩国市は、徒歩で二時間ぐらいで着くため、その道中は、グラドがこの世界について知っていることを、青年に教えた。

この世界は、過去に多くの戦いがあった。五十年近く前、日本に『ゴジラ』、米国に『キングコング』が出現し、人類は多大な被害を被った。特にゴジラは、一度倒された後も、他の個体が出現し、『モスラ』や『ラドン』などの新たな怪獣が出現し、人類の損失は多かった。そんな中、怪獣の棲む地球を滅ぼし、宇宙へ逃れようとする人間達と地球を守る者達との間での戦争が始まった。その戦争の中で、『M

S(モビルスーツ)などの人型兵器が開発されて、戦争は激化した。月に突如として出現した『BETA』や突如として現れた『恐竜帝国』、『百鬼帝国』との戦争に突入した。恐竜帝国・百鬼帝国は、早乙女博士が生み出した『ゲッターロボ』によって倒され、世界中の軍は、ゲッターロボを量産しようとしたが、早乙女研究所で起きた事故で、早乙女研究所にいた人間が突如として消え、この時、唯一残っていたのは、ゲッターロボのパイロット二人だけで、パイロットの一人『流竜馬』のその後は不明だが、もう一人のパイロット神隼人は、ゲッターロボの動力源であるゲッター線に関する資料を封印し、ゲッター線を使用しない新たなロボットの開発を始めたらしい。その後、宇宙から現れた謎の敵『ガイゾック』が現れ、新たなスーパーロボット『ザンボット3』との戦いに突入する。だが、多くの人々は、ザンボット3を持っている神ファミリィがガイゾックを地球へ呼び寄せたのではないかと非難した。そんな中、ザンボット3とガイゾックの最後の戦いが始まり、神ファミリィは、ザンボット3のパイロット『神勝平』を残して全員が死亡した。幾多の戦いで多くのMSが失われ、BETAにより、世界中が蹂躪されて、世界中の軍は、MSより低コストで生産できる戦術機を開発した。近年に地球へと飛来した謎の生命体『ラダム』や新たな敵勢力として、人類に宣戦布告をした『Dr.ヘル』と『プロフェッサーランドウ』の『機械獣』、『メタルビースト』軍団などの出現で、地球の総人口は、八億六千万人にまで減少した。だが、人類もやられてばかりではなかった。兜十蔵が生み出した、スーパーロボット『マジンガーZ』を中心としたスーパーロボット軍団が生まれた。今の時代での脅威は、怪獣とBETAである。巨大怪獣は、BETAの『光線級』が集中攻撃しても、あまりダメージを負う事は少なく、人類でまともな相手ができるのは、マジンガーZか、MS最強クラスの武装である『サテライトキャノン』、米国の生み出した兵器『G弾』ぐらいである。だが、サテライトキャノンは、月面大戦中に、月の衛星軌道に設置されたサテライトシステムの反射衛星が破壊されたため、月が出ている時にしか使用できない。月面の戦力は、宇宙総軍の基地にいる数千名しか残されていないらしい。地球の連合



軍は、人類よりも優れた身体能力を持つ『ニュータント』で構成された部隊を発足した。そして現在、世界中で多くの者が、母国のため、仲間や家族のために戦っている。

青年「本当に僕の知っている世界とは違いますね……………」

グラドから、この世界について説明を受けた青年は、そう呟いた。

グラド「そのようだな、そういえば、怪獣やMSとかの話をしたとき、知っている様だったが、お前の世界でも怪獣が暴れたり、MSで戦争をしたりしてたのか？」

青年「はい、ただ僕のいた世界には、この世界の半分にも満たないぐらいしか怪獣はいませんよ、ただMSの場合は、何度も戦争で使われていましたので、この世界よりも多くのMSが開発されたと思います」

グラド「へえ、そうかい」

グラドと青年は、それから一時間ほど歩き、目的地の米国軍基地へと到着した。

青年「……………それにしても、ひどい有様でしたね」

青年が言っているのは、途中に通った岩国市の変わり果てた姿のことだ。

グラド「日本はまだいいさ、BETAに一度蹂躪されたが、その半分近くが、後に怪獣共にやられて西日本を取り戻せたんだからよ」

三年前までこの日本には、BETAの前線基地である『ハイヴ』が二つ存在したが、その内の一つである『横浜ハイヴ』アメリカの新兵器G弾により消滅し、その後、西日本に怪獣王ゴジラが出現し、BETAがゴジラに集中している間に数少ないMS部隊と日本最強のスーパーロボット『三式機龍』を西日本に送り込み、守護者の怪獣『モスラ』、『アンギラス』の助けもあり、西日本のBETAの七割を殲滅し、ユーラシア大陸へと追いやった。だが、BETAを殺し尽くしても暴れ続けるゴジラを倒すために戦った機龍は、ゴジラと共に日本海へと沈み、西日本を取り戻しても、BETAに破壊し尽くされた西日本に帰ってくる者はいなかった。たとえ帰りたくても、またBETAが上陸する可能性が高く、政府は西日本へ行くことすらも禁止にした……。

青年「それにしても、この基地はよく無事でしたね」

米軍基地はほとんどBETAに破壊されていなかった。単に海側にあつたからという理由かもしれないが。

青年「でもこの基地に何をしに来たんですか？」

グランド「いやあ、俺の機体をさ、この基地に隠していてよ、それを取りにな」

青年「あれグランドさん？あなたは戦術機かMSでも持っているんですか？」

青年は正直驚いていた。なぜなら、このグランドはロボットに乗れないからこんな馬鹿でかい銃で戦っていんじゃないかと思っただからだ。

グランド「お前の言いたいことは分かる、確かにこんな俺がロボットに乗るのは変かもしれないが、BETAなんて万単位で攻めてくるの

が普通なんだぜ、自分専用のロボットぐらい持っていないと生きていけないよ」

青年「…は、はあ」

それから二人は基地の中に入っていく。二人は格納庫の前まで来た。

青年「この中にグアドさんの機体が……」

グアド「ちょっと待ってるよ、半月ぐらい動かしてないから、メンテナンスしてくるからよ。」

青年「そうですか、じゃあ僕は海でも見て来ます」

青年は、グアドに自分のリュックサックを預ける。

グアド「基地の中からは出るなよ、もしもの時は、お前に渡した通信機を使え」

青年「分かりました」

グアドは、格納庫の中に入っていき、青年は基地の滑走路まで行き、そこから海を眺めた。

青年「そういえば僕、この世界に来たとき、砂浜で倒れていたんだよな、その時は海なんか見る余裕は無かったけど、こっつて見ると、僕の世界の海と変わっていることはないんだよな」

それから数分くらい経過し、充分海を眺めた青年は格納庫の所まで戻ろうとした時だった。

??? 『ギィアアアアアアアアアアア!!』

青年「!?」

突如、青年の耳に何かの音が聞こえた。

青年「今のはいったい! ……………! あれは!」

青年は海の方を見ると、小さな人影らしきものが、四匹の鳥のよ  
うな巨大生物に追われていて、こちらに向かっていているのだ。

青年「あれは『ラドン』!? いや違う、別の怪獣だ!」

青年はとっさに通信機で、グラドに連絡を取る。

青年「グラドさん! 怪獣がこの基地へ向かってきます! メンテナン  
スは終わりましたか!」

グラド『なんだと! 怪獣がこの基地へ!? おい小僧! 早くこっちへ  
戻ってこい!』

青年「ですが、怪獣に追われていてる人がいるんです!」

グラド『駄目だ! 早くしないとお前が死ぬぞ!』

青年「…で、ですが…、うわあああ!」

グラド『おい! どうした! すす…! ……………!』

青年は、怪獣の翼が引き起こした突風で吹っ飛ばされ、近くのコンテナに叩きつけられた。

青年「くそ、周りを見てなかったからか、そういえば通信機は!？」

通信機は壊れていた。青年は体を起こす。

青年（そういえばグラドさん、さっき、僕のことを小僧と呼ばなくて、なんか言ってたな、すすまで覚えているけど、通信機が壊れたから最後まで聞こえなかったな、……………ってそんなことを気にしている隙はない！怪獣は、追われていた人はどうなったんだ！）

青年は滑走路を見る、そこにいたのは……………。

怪獣「ギヤアアアアアアアア！」

先ほどの怪獣達だ。一匹の怪獣が吠えると、他の三匹も吠える。怪獣は鳥の様にも見えるが、羽毛などはなく、翼は蝙蝠の方が近いかもしれない。平らな頭で平らな突起物が二つ後ろを向いていて、眼は赤一色だ。

??? 「う、うっ……………」

青年のすぐ近くに、人影が見えた。だが、それは人型なのだが変わった姿をしていた。全身が鎧のようなものを纏っていて、一部が桃色なのと、その体格で女性だと思われるが、あんな怪獣達から逃げてきたにしては、背中にはブラスターが装備しているわけでもないのだ。パワードスーツのようにも見えるが、明らかに地球上の技術ではないと青年は直感的に気づいた。

青年「大丈夫ですか？」

青年は怪獣に気づかれないように、そっと謎の女性に近寄り、声をかけた。

謎の女性「…あ、……貴方は？」

青年「僕はただの旅人です、早くこの場から逃げましょう、僕と一緒に来た人が近くの格納庫にいますから」

青年はそう言って、彼女の手を掴み、この場から離れようとしたときだった。

怪獣「ギャツ！ギャアアアアアア！」

怪獣の中の一匹に見つかってしまった。

青年「まずい！早く逃げよう！」

謎の女性「私を置いて逃げてください！私は化け物みたいな人間で、そうすぐには死にませんが、貴方は普通の人間ですよ！すぐに死んでしまいますよ！」

青年「嫌です、目の前で死にそんな人を助けられない方が死ぬより辛いですから」

女性は、自分のせいでこの青年を危険な目に遭わせたのに、この青年は、そんな自分を助けようとするのに涙がこぼれそうになった。

謎の女性「ちょっと離れててください」

青年「まさか、この体で戦うつもりですか!？」

謎の女性「大丈夫です、私は『テッカマン』、テッカマンレイピアです、そう簡単には倒されませんよ」

女性は、どこからか出したか分からない剣を構えて、怪獣達へと突っ込んでいった。

青年「レイピアさん!」

レイピア「いっけええ!」

テッカマンレイピアは、自分の武器である剣テックソードで空から急降下し、怪獣の右翼を切り裂く。

怪獣「ギャルアアアアアアア!」

右翼を切り裂かれた怪獣が悲鳴を上げる。

レイピア「よし!この勢いでいけば!」。

怪獣「ギャワアアア!」

レイピア「きゃあああああ!」

テッカマンレイピアは、後ろから怪獣に翼で地面に叩き落とされた。

怪獣「ギャアアア!」

青年「レイピアさん危ない!」

怪獣がレイピアを食らおうとしたその時だった！

グラド『これでも食らいな蝙蝠野郎！』

グラドの声が聞こえ、グラドのいた格納庫の方から黄色い光の砲撃が放たれて、レイピアを食らおうとした怪獣を消滅させたのだ。

青年「今の声はグラドさん！」

すると、壊れて画面が真っ黒だった通信機の画面が明るくなり、グラドの通信が入った。

グラド『おい』進(すすむ)『！大丈夫か！今の攻撃で死んでないよな！』

青年「大丈夫ですよグラドさん！というか進って誰ですか!？」

グラド『俺が考えたお前の名前だよ、『道切進(みちきり すすむ)』、名前がないと不便だろ?』

進「……………ありがとうグラドさん、会ったばかりで見ず知らずの僕に名前をくれて」

グラド『なあに、いいってことよ、そんなことより、おまえが助けようとした奴を連れて早くその場から離れろ、その怪獣『ギャオス』はしつこく狙ってくるぞ!』

進「分かりました！」

道切進という名を得た青年は、倒れていたレイピアを背中に乗せ



て、その場から離れようとする。

ギャオス「ギイアア！」

進「危ない！」

ギャオスは、進達に攻撃を仕掛けようとした、それを察知した進は近くの格納庫の陰にレイピアを下ろすも、進はギャオスの超音波メスを真っ正面から食らってしまう。

進「うおおおおおー！」

だが！彼はその攻撃を両手で受け止めたのだ！

レイピア「まさか、あの攻撃を受けめた!？」

レイピアは、自分でも耐えきれなかった超音波メスに生身で耐えた進を見て、驚愕する。

レイピア「貴方はいったい……?？」

そう言ったレイピアに対し、超音波メスを耐えきった進は少し笑みを浮かべて言う。

進「僕も化け物ですよ、あなたとは違いますがね、まあそれ以前に僕は本当は人間じゃない」

レイピア「…えっ?？」

進「僕は人間が生み出した破壊の使者、怪獣王の息子」

進がそう言うと、彼の身体は蒼い光に包まれる。

ギヤオス（三匹）『ギィア!?!』

ギヤオスはその光を見て怯えていた。そして光は50mぐらいの大きさになり、光は消える。

だが、そこに進の姿はなかった。そのかわりに全身が黒い巨大な生物がそこにいた。

レイピア「あ、ああ……」

レイピアはその姿に見覚えがあった。自分が知る破壊の王と呼ばれた怪獣とそっくりなのだ。

そう、その名は……………。

レイピア「……………ゴジラ」

ゴジラ「グルオオオオオオオオオオ!!」

怪獣王『ゴジラ』の咆哮が米国軍基地に響き渡った。

## 第二話 黒き力と白き因果

国軍基地に響き渡る咆哮は、大地を震わせ、海を揺らした。

グラド「ゴジラだと？……………しかも、俺の知っている個体とは違う？」

自分の機体のコックピットの中にいるグラドは、メインカメラに映るゴジラを見てあることに気づく。過去に戦場でゴジラを見たことがあるグラドだが。今、自分の目に映るゴジラは戦場で見た個体よりも少し緑がかった容姿の違ひも多い。彼の見たゴジラとの大きな違いの一つは、背ビレで、彼の知るゴジラは背ビレが炎のように鋭利で紫の部分が、あのゴジラの背ビレはどちらかというと一部が白く、形も綺麗に並んでいるかんじである。どちらかと言えばあのゴジラは、初めて日本に出現したゴジラに似ていて、彼の知っているゴジラよりも、腕や足が太く、力強さが伝わってくる。

そしてグラドは、先ほどの通信で聞こえた進の言葉を思い出す。

グラド「まさか、あれは進なのか？」

そんな確証はなかった。だがグラドは、もしかしたら、あのゴジラは進ではないのかと考えている。しかし、それならば、進と会ったときに気づく筈だろうとも思う。

グラド「……………くそっ、考えたって何も分からねえ、ちょうどこの調整が終わったことだし」

そつ言つてグラドは、自分の愛機を動かし、格納庫から出る。

グラド（この目で確かめてやる、あのゴジラの正体を）

ゴジラ」……………」

身長50m近くある巨体は、黙ったままギャオスを睨みつける。

ギャオス「ギャ…ギャルア……………」

ギャオス達は、自分達を睨みつけるゴジラに恐怖を感じているようにレイピアに見えた。

レイピア（この感じは何？あのゴジラから感じられる……………これは怒り？）

ギャオス「ギャワアアア！」

我を忘れた一匹のギャオスが、ゴジラに向けて超音波メスを放つ。  
……………だが。

ゴジラ」……………」

超音波メスはゴジラの体に当たると、拡散して消えた。

レイピア（嘘!?なんて防御力なの!?)

ギャオス「ギューエエエエ!!」

ギャオスはやけになり、ゴジラに体当たりを試みる。

(…………ガシッ)

だが、ギヤオスの頭がゴジラの左手に掴まれる。ゴジラの二分の一ほどの大きさしかないギヤオスは、悶え苦しむ。

ゴジラ「…ガッ！」

ゴジラの左手が蒼く輝くと、ギヤオスの頭、そして体は膨張し、最後には爆散した。

レイピア（！あの怪物がいても簡単に倒されるなんて！）

ギヤオス「ギイ！ギヤワアア！」

目の前で、同族が一撃で殺されて、逃げるようにギヤオスは空へと羽ばたく。

ギヤオス「ギギイ！ギヤオワアアア！」

翼が切り裂かれたギヤオスも、なんとか空へと逃げれた。

……………しかし、怪物王から逃げれるはずはなかった。

ゴジラ「グルアアアアア!!」

ゴジラの口から、青白い放射熱線が翼を切り裂かれてうまく飛べないギヤオスへと放たれる。

ギヤオス「ギヤ、ギヤオワアアア!!」

ギヤオスは断末魔と共に、放射熱線によって爆散する。

ギヤオス「ギツ、ギイ！」

唯一生き残ったギヤオスは、ゴジラから逃れるために最大速度で逃げようとした。

ギヤオス「ギヤワアア!?」

突如、黄色い光の一撃が、ギヤオスへと当たり、ギヤオスは跡形もなく消滅した。

レイピア「あの攻撃はさっきの…」

レイピアは攻撃が放たれた方を見るとそこには、巨大な銃を持つ30mぐらいの大きさの人型ロボットがいた。

そのロボットは、全身が赤茶色でマント纏っていて、ボディには傷が多く、明らかに他の機体のパーツを使っている箇所が多かった。その頭部には二つの角があるが、一本は折れていた。左腕は普通の腕だが、右腕には巨大な銃が握られており、その銃を持つ為なのか、右腕にはバランスサーがあり、左腕よりも大きく、並みの戦術機なら殴られただけでひとたまりもないだろう。

グアド「おい嬢ちゃん、無事か？」

ロボットに乗るグアドは、ロボットのスコープに映るレイピアにスピーカーで無事を確認した。

レイピア「はい、大丈夫です、ですが……………」

レイピアは、ロボットをじっと観るゴジラの方を見た。

グアド「おい、俺の言葉が分かるかどうか知らないが一応言ってお

く……………お前は進なのか？」

ゴジラ「……………」

ゴジラは一度、グラドの機体とレイピアを見て、海の方を見る。

ゴジラ「ガアアアアアア」

ゴジラが鳴くと、ゴジラの体は蒼い光に包まれる。

レイピア「これは……………さっきと同じ光？」

青い光は、人間サイズまで小さくなると光は消え、そこには先ほどと同じ姿の進が立っていた。

グラド「……………進」

レイピア「……………」

二人は、目の前の人物が進だと分かっていたが近寄ることはしなかった。だが、先ほどのゴジラが進の姿になったと考えると進は人間の姿をした怪獣と考えられたのだ。

進「…すいません、僕が化け物だと思われてもかまいません、ですが、一度話を聞いてもらえないでしょうか」

グラド「……………」

進（やっぱり駄目かな、あんなの見たら誰だって……………）

グラド「よし、解った」

進・レイピア『えっ？』

二人は簡単にグラドが答えたのでびっくりする。グラドは機体の胸部にあるコックピットのハッチを開き、外に出てきて進の前に立つ。

グラド「じゃあ聞かせてくれよ、お前が誰なのかを」

進「いいんですか？ 僕が化け物かもしれないのに？」

グラド「たとえば化け物でも、お前はそこにいる女の子を守った、違うか？」

進「……………」

進は、この人なら安心して話せると思った。

グラド「それで嬢ちゃん、身体の方は大丈夫なのかい？」

グラドは、自分に続いて進の元へと歩いてきたレイピアに身体の状態を確かめる。

レイピア「まあ、ひとまずは大丈夫です」

グラド「それならいいけどよ、その鎧は脱がないのかい？」

レイピア「……………」

グラド「ん？ ぶっしたんだ？」



するとレイピアは、恥ずかしそうに言う。

レイピア「私、この下には何も着てないんです」

進・グラド『へっ?』

レイピア「私これでも女の子なんですよ、いくら何でも男の人の前で脱ぐなんて。」

グラド「お、おお、すまねえな、そういえば基地の中に女物の服があったと思うからちょっと取ってきてやるよ」

十分後、グラドが基地に保管してあった緑の軍服を持ってきて、レイピアは変身を解き、その服に着替えた。

レイピア「お待たせしました」

グラド「おう、終わったか……………?」

グラドは、レイピアの姿を見て正直驚いていた。なぜなら、あの鎧の下はある程度鍛えた軍人でも入ってると思っていたが、実際は年も若い少女だったからだ。

グラド「そういえば名前を聞いていなかったな、俺達に教えてくれないか?」

ミュキ「あつ、そうでしたね、すいません、私の名前はミュキで名字の方は事情があって言えませんが、年齢は16で日本人です」

グラド「16だと!？」

グラドはさらに驚いた。16の少女があんな鎧を纏って怪獣と戦っていたことが普通では考えられないからだ。

「ミュキ、そんな事より進さんの事について早く教えてもらいましょう」

グラド「お、おぉ、そうだな、進話してくれよ」

進「では、始めに言っておきます、僕はあなた方が思っているとおり別世界の怪獣ゴジラです」

グラド「いきなり言ったな」

進がいきなり、自分の正体を明かし驚いていた。

「ミュキ」え!?進さんは別世界から来たんですか」

進「すみませんね、言い忘れていました、まあ、あなた方の様な優しい方々なら僕がゴジラだということを話しても大丈夫でしょう、じゃあまずは、ゴジラについて説明しますね、この世界のゴジラはどうか知りませんが、僕達の世界では、ゴジラザウルスという恐竜の生き残りが人間の生み出した核の力によって変貌した姿です」

グラド「皮肉な話だ、自分達が生み出した力が怪獣を生むなんてな」

「ミュキ」……………」

グラド「ん?どうしたんだミュキちゃん?」

暗い顔になったミュキを見たグラドは、彼女に声をかける。

ミユキ「あつ、何でもありませんよ、それよりも進さん、続きをお願いします」

進「分かりました、では次は僕について説明しましょう、まずは元々、アドノア島という島にあつた卵から誕生したただのゴジラザウルスでしたが、僕は生まれた頃は人間の手で育てられました、ですが、その中にも優しい方々はいましたが、僕はゴジラを誘き出すための餌として利用されました」

グラド「よくそんな目に遭つて俺達を信用できたな」

進「大丈夫です、僕は人類と敵対するのが目的ではありませんから、それに、その事があつたから僕は父さんと出逢えたんですから」

グラド「お前の親父がゴジラのことだったのか……」

進「まあ、そうですね、あの世界では僕と父さんしか同種族はいませんでしたから、他にも、父さんに力を託して死んでいったラドン兄さんがいますね、あの方のおかげで父さんと僕は出逢えたんで」

グラド（もう、質問の量が多すぎて聞く気も起きねえよ）

そして、進は語つた。彼と彼の育ての親であるゴジラとのバース島での暮らしを、彼はとても成長の速度が早く、一年ぐらいで父の三分の一近くまで成長した。彼は、その頃に宇宙から飛来した最凶最悪の怪獣『スペースゴジラ』を仲間だと思つたが、スペースゴジラによって結晶体に封じ込められた、だが、ゴジラがスペースゴジラを倒したことにより彼は解放された。彼はまた父との暮らしが戻つたことに喜んだ。……しかし、悲劇は起きた。

彼らが住むバース島が消滅し、その時に起きたウランの核分裂で彼は不完全なゴジラ『ゴジラジュニア』となり、ゴジラは、最悪なこと

に体内の温度が上昇し、メルトダウンが迫っていた。ゴジラジュニアは、父が見つからず、帰巢本能でアドノア島へと帰ろうとしていたが、彼を慕っていた超能力者の女性ともう一人の超能力者のテレパシーによって、東京へ向かい、破壊の限りを尽くす怪獣『デストロイア』と戦った。デストロイアをなんとか倒したゴジラジュニアは、東京へ向かっていったゴジラと再開するも、ゴジラの目の前でゴジラジュニアは上空から地面に叩きつけられる。ゴジラは、この時に自分の生命力をゴジラジュニアに与えるも、意識は戻らず、目の前で唯一の仲間であり息子であるゴジラジュニアを奪ったデストロイアに容赦なく攻撃した。だが、戦いの中でゴジラの体の限界が迫り、デストロイアは最終的に日本軍の兵器と日本のスーパーロボットによって倒された。ゴジラはメルトダウンを止めようと冷凍兵器で何とか抑えようとした。

そして、長年、最強と呼ばれた怪獣王ゴジラはその生涯に幕を閉じた。メルトダウンは抑えられたが、東京中に散布された高濃度の放射能で、東京は死の都と化すと思われた。だが、奇跡は起きた。

進「父さんが与えてくれた生命力でなんとか生きていた僕は、東京中の放射能を全て体内に吸収して完全なゴジラになりました、そして、僕は姿をくらし、僕と同じ様に行く当てもない怪獣仲間にして世界中を見て回り、地球へ襲来した宇宙人が残した怪獣を人間へと変える装置で、この姿になれるようになったんです」

グラド「最後のあたりは、もうめちゃくちゃだな」

進「まあ、運が良かっただけですよ、ただ僕がこの世界にいることを仲間にかたして伝えないといけません、彼らは、仲間のためなら無茶する馬鹿ばかりですから」

グラド「お前の話を聞いてたら、怪獣もいい連中ばかりだな」

進「別にそうでもないですよ、僕達みたいな人間との共存を望む怪獣なんて下手したら同種族からも命を狙われかねないですから」

ミュキ「でも、あなたみたいな怪獣がたくさんいれば、この世界の人類もここまで衰退しなかったかもしれないのに」

進「それは分かりませんよ、人間も悪魔になれるんですから」

ミュキ「……」

進「すみませんミュキさん、ただ僕はそうなるように努力はします、仲間や世界のために」

グラド「そういえば、さっきも言っていたが、お前の仲間はどんな奴らなんだ」

進「一言で言うなら、怪獣なのに人間とほとんど変わらないような性格の連中です」

グラド「ははっ、そうか、とりあえずはこれからどうするか決めようぜ、まあ、進は分かっているが、ミュキちゃんはまだ人には話せないことが多そうだから、ひとまずミュキちゃんは、俺の知り合いの所へ連れて行こう」

ミュキ「その人は信頼できるんですか？」

ミュキは正直心配だった。自分の正体がばれるといろいろ危険だからだ。

グラド「大丈夫だって、ちょっと性格は荒いけど仲間とかの絆は大事にする男だから」

そう言っただら、自分の機体のコックピットに乗る。

進「そういえば、さっきから気になっていましたが、そのロボットは何なんですか？」

グランド「ああ、こいつのことか、こいつはな『ブラストホーク』って名前で、スーパーロボットの技術を取り入れた機体で射撃や砲撃とかが主な戦い方だ」

そう言っただら、グランドは、西洋の兜にゴーグルを被せたようなブラストホークの顔を進達の方へと向かせる。

グランド「まあ、触ってもいいが、勝手に壊すなよ、パーツを揃えんのだるいんだから」

グランドはそう二人に忠告して、コックピットの中にある通信機で連絡を取る。

グランド「電波悪いな……おっ、繋がった、おいモトコ！俺だよグランド！ちょっとお願いがあつてさ」

グランドは通信で会話すること十五分が経過した。

グランド「おいミニキちゃん！俺の知り合いの香月モトコって医者だよ、ひとまず面倒観てくれるってよ……」

ミニキ「本当に大丈夫なんですか？」

グランド「大丈夫だって、あいつの妹は危険だけど、モトコなら信頼

できるってー！」

ミノキ「それならいいんですけど、進さんはどうするんですか？」

進「確かに、僕が別世界から来たって信じてくれる人がいるんですか？」

グランド「それだけど、進は今言ったモトコの妹の所へと連れて行く」

進「ちょっと待ってください！今さっき、その妹さんは危険だって言ってたじゃないですか！」

グランド「大丈夫だろお前なら、怪獣だし」

進「そういう問題じゃありません！」

なんだかんだいって、三人のこれからは決まろうとしていた。

場所は変わって、とある島。

???「ここはどこだあああああ!!」

青年、白銀武は叫んでいた。何処かもわからない離島にたった一人で半日もいるせいで、彼は叫ぶことしかできなかった。

武「まったく、なんでこんな島にいるんだよ！」

武は、本来違う平行世界の人間だが、ある日、BETAによって、滅茶苦茶にされた違う世界の地球で目覚めた。いろんなことがあり、仲間と共に頑張っていたが、オルタネイティヴ5の発動で人類の一部は

他星系へと移住することになったが、大多数の人類が地上へと残されて戦っていたが、G弾の影響で地球の環境は変わり果ててしまった。そんな地球で戦っていた彼は先ほど、自分の部屋で目覚めたが、外に出てみると、かつて人が住んでいただろう島の小さな村にいたのだ。家は奇跡的に綺麗な状態で残っていたが、中はゴミ屋敷そのものになっていたため外に出たが、今度は船が無く、島中を見て回ったが、船などどこにも無かった。そんなこんなで彼は、陸一つ見えない海の方を眺めていた。

それから一時間ほど経ち、彼は浜辺に行くと小さな船が見えた。

武「やった！これで助かる！」

だが、船が在るところへ行くが、周辺には人影は無く、武は、砂浜にあつた足跡を追って走った。

武「あつ！」

武は遂に人間を見つけた。白いシャツを着ただらしなさそうな男が港の近くに立っていたのだ。

武「おーい！あの船は貴方の物ですか！」

武は、男に近づき話しかける。だが、男は返事しない。

武「？どうしたんですか？」

男「……………キッ……………キキッ」

武「えっ？」



突如、目の前の男が緑色の虫のような怪物に姿を変えた。

武「うわぁー！」

武は反射的に怪物と距離を取る。だが、怪物は武に狙いを定めてゆっくりと近づいてくる。

武「何なんだよお前は、うおおおー！」

武は、近くにあった鉄パイプを掴み、怪物の体へと振り下ろす。

怪物「ギイ？」

武「なっ!？」

鉄パイプは折れ曲がり、怪物も大した反応をとらなかった。武はそれに驚愕する、なぜなら、彼の体は常人以上に鍛え上げられていて、普通の人間なら一発殴るだけで気絶させるぐらいよくなった筈だからだ。

武「くそー!どうすれば……」

怪物「ギシャアア！」

武「うわぁぁぁー！」

その時だった！

???「ハアア！」

何者かが武と怪物の間に割って入ってきて、怪物にパンチを決め

た。

武「!？」

???「おい、大丈夫か？」

武「は、はい」

武は、自分を助けた者を見た。それは蜂を模したような黄色いパワードスーツを全身に纏った男だった。

武「貴方はいつたい？」

ザビー「俺の名はザビー、『仮面ライダーザビー』だ、時間が無いから話ならあいつを倒してからにする。」

そう言っただザビーは、怪物の方を見る。

怪物「ギユワアアア！」

怪物は、虫のように脱皮し、蜘蛛のような怪物へと姿を変えた。

ザビー「ちっ、脱皮しやがったか、まあこっちは最初からライダーフォームだからワーム一体ぐらい問題ないがな」

ワーム「ギシャア！」

蜘蛛の怪物『アラクネアワーム』は突如として姿が見えなくなる。

ザビー「なら此方も、クロックアップ！」

《Clock Up》

その瞬間、武の目の前からザビーの姿も消える。いや、正確にはザビーとワームの動きが速すぎて武には見えないだけなのだ。

《Clock Over》

そして、武の目の前にはいつの間にか、ザビーの猛攻でダメージを負ったアラクネアワームと余裕のザビーが立っていた。

ザビー「これでとどめだ、ライダーステイング！」

《Rider Stinging》

ザビー「ハアッ！」

アラクネアワーム「ギュシャアアア!!」

ザビーの必殺技『ライダーステイング』を食らったアラクネアワームは爆散する。

武(す、凄い！)

武は、ザビーの強さに感激していた。

ザビー「ふう」

ザビーは変身を解くと、二十歳ぐらいの男が出てきた。

影山「俺の名は『影山瞬』、対ワーム撃滅組織『NECT』のチーム『シャドウ』の副隊長で、階級は中尉だ」

武「ZECTなんて組織は聞いたこと無いぞ、この世界はいつたい？」

影山「その反応を見る限りでは、お前が白銀武だな？」

武「どうして俺の名を…！」

お前のことを知っている女から、この島で白銀武の反応があったと報告があつて、俺が来たんだ、わざわざ兄貴から、ザビーゼクターを借りてきてよかつた、まさか、ワームに襲われているとはな」

武「そのザビーゼクターとなワームっていったい？」

影山「そんな事は、横浜基地に着いてからにしろ、あの魔女は五月蠅いんだ」

武「横浜基地!？」

影山「うるさい！早く行くぞ！」

そして武は、浜辺にあつた影山の船へ乗り日本帝国の横浜基地へと行くことになった。

そして場所は変わる。

横浜基地の中にある『香月夕呼』の研究室、そこには香月夕呼と謎の少女『社霞』、そして、日本のスーパーロボット『ゲッターロボ號』の開発者の一人でもある神隼人がいた。

隼人「先ほどの話は本当か？」

夕呼「はい、別世界から来た人の姿を持つ怪獣王の息子と因果に導かれた男がこの基地へと来ます」

隼人「こっちは、アラスカにゲッターチームを送ってから、毎日、新兵器の開発で忙しかったからな、彼らの存在が我々にとってプラスになるのか？」

夕呼「それは分かりませんが、前者は、こちらの戦力になれば我々人類にとってはとても役に立ちましょう」

隼人「ゴジラは、ゲッター線で死ぬどころか活性化する奴だからあまり刺激を与えるなよ」

夕呼「分かっています神大佐、話は変わりますがプロフェッサーランドウとDr・ヘルの方は最近行動を動きませんね」

隼人「そうだな、マジン大戦が終結してから目立った動きを見せてないな、ランドウは、北極にしていることは分かっているが、それ以上にDr・ヘルの方が厄介だからな」

夕呼「まったくです、BETAやラダムの対策で戦力が減る一方で、貴重なスーパーロボットが減るとまずいですからね、それで例の男もこの基地へと召集します」

隼人「彼をか？大丈夫なのか？」

夕呼「大丈夫に決まっていますよ、あの大戦を生き抜いた英雄なので、すから『兜甲児』は」

隼人「まったく、俺達は何処へ行こうとしているのだろうか…」

夕呼「そうですね、少なからず、明るい未来でも目指しますか？」

隼人「お前が言うと変な感じだな」

夕呼「ふふつ、貴方だって昔はそんな性格じゃなかったじゃないですか」

隼人「うるさい、昔の話はするなと言っただろ」

夕呼「はいはい、まあ、これからはさらに忙しくなりますから、今ぐらいは楽しみたいですよ」

隼人「まったくだ」

この横浜基地で、怪獣王の息子と因果に導かれし青年が出逢う日も近い……………。

## 第三話 三日月の戦士と炎の巨人

道切進が本来いた世界、この世界で今、新たな物語が始まろうとしていた。

新暦92年9月3日

日本、二年前までは、異星人や怪獣の出没数一番で悪の組織によって征服されかけたことがあった国だったが、日本のスーパーロボットや仮面ライダーと呼ばれる英雄の活躍で、今では世界で一番安全な国と呼ばれている。

そして現在、とある県の山奥にある小さな家で物語が始まる。

彼の名は『朝倉 悠真（あさくら ゆうま）』、今年で16歳になる少年である。彼には、両親はおらず、一人の老夫婦によって育てられていた。朝倉という姓も、彼を育てた老夫婦からいただいたものだ。だが、その老夫婦も半年前に妻が、2カ月前に夫が寿命で亡くなり、彼は老夫婦が生前に貯めていてくれた貯金で暮らしている。

悠真「平和だなあ」

自分で作った朝食を食べ終えた悠真は、改めて今の平和を実感する。ここ最近では連合軍とネオジオンの戦いのニュースはあまり聞かない。

だが、彼の平和な時間は、そう長くは続かなかった。

??「よお悠真！飯食ったか？食ったんなら早く行こっぜ！」

突然家の扉を開き、騒がしい男が入ってきた。

悠真「朝からつるさいですよ、「コダイさん」

轟良「だから、「コダイじゃねえっていつも言ってるだろ！俺の名は『古代 轟良（ふるしろ じゅうら）』だ！」

茶髪の長身の男、古代轟良が悠真からコダイさんと呼ばれている理由は簡単、単に古代という名字をそのままコダイと読んで、その方が呼びやすいからである。

悠真「しかし、なんでこんな朝から行くんですか？」

轟良「えっ…それは」

悠真「また霊季さんですか…」

轟良「ちげえよ！とつとと支度しろ！」

悠真「はいはい」

悠真は、食器を洗い、外に出る支度をする。

悠真「じゃあ行きますか」

轟良「ああ」

二人は、悠真の家の裏山にある洞窟へと行く。

一週間ほど前、悠真の家の前に空腹で倒れていた轟良を家主である悠真が看病し、その後日には、轟良の彼女と思われる『黒馬 霊季（くろめ れいき）』が悠真の家に訪れて、勝手に霊季の前から逃げたはいが、食料など持っていなかったのが経緯で悠真の家の前に倒れて



いたらしい。

二人は旅をしていて、他にも二人の仲間がいたのだが、今は別行動しているらしい。

ただ、悠真はこの二人からは名前しか教えてもらってないため、二人の行動をよく観察している。まあ悠真にも、人に言えない秘密を抱えているのだが……。

轟良「にしてもよ、『あれ』をこんな所に放置しててまずくないのか？」

洞窟の奥へと進みながら、轟良が悠真へと問う。

悠真「大丈夫だよ、それにあれは僕以外には使いこなせない」

そして二人は、その辺の体育館の二倍以上はあるんじゃないだろうかと思われる広い空間に出た。

轟良「いつ見ても凄い迫力だよな、この巨人、いやロボットか？」

その空間には、巨大な鋼の巨人が立っていた。

悠真「まったくだよ、こいつの生みの親の顔が見てみたいよ」

全高が20m以上あるこのロボットは、日本の甲冑を模したようなボディで全体的なカラーは青紫、ラインや鋭利な部分、そしてこの機体の存在感を示す頭部の三日月型の角は金色である。両腰にある鞘には一本ずつ刀が納められていて、背部には、機関砲らしき武装が二つ備えられている。

悠真「そもそもこいつ、どうして僕の所に来たんだろ？」

悠真とこの機体が出逢ったのは1ヶ月前のことで、季節はずれの大  
雨で、裏山にある老夫婦のお墓が無事か確認しに行ったときに裏山の  
一部が崩れて、崩れた場所に開いた穴の中に入りこのロボットを見つ  
けたのだ。

しかも、このロボットを悠真は簡単に操縦した。元々、ロボットの  
パイロット専門学校に通っていたからできたのだと思われたが、  
このロボットは他の人間が操縦使用すると機能を停止してしまう。  
それは、轟良や霊季で一度試している。

悠真「いい加減にこいつをどうするか考えないと」

悠真は、毎日このロボットの整備をされていて轟良はその手伝いをし  
ている。

轟良「そつだよな、でもどうするんだ？連合軍にでも渡すか？」

悠真「さすがに軍には…、このロボットが戦場で人を殺めるのは嫌  
だな」

轟良「まあ、なんだかんだ言ってお前はこいつのこと気に入ってる  
からな」

悠真「別にそんなんじゃ…」

??「轟良あー！そこにいるんでしょー！」

突然、洞窟内に女性の声が響きわたった。

轟良「げっ！この声は…！」

悠真達がいる空間に一人の女性が現れる。

??「ひどいじゃない！一人で行くなんて！」

轟良「うるせえな！別にいいだろ！」

綺麗に伸びた白髪を持つ女性、黒馬靈季は背中まで伸びた白髪を振り乱しながら、轟良と口喧嘩をする。

ちなみに轟良が、靈季より早く来よつとしたのは靈季の作る朝食を食べたくないからである。

悠真（確かに靈季さんの料理はひどいけど、靈季を置いていった轟良さんも悪いよな…）

靈季「そんなんだから、あの二人に脳筋なんて言われるのよ！」

轟良「おい！今の話の何処に脳筋なんて言われるようなことがあったんだ！」

この二人の様子は、ただの痴話喧嘩をするカップルである。この様子を知っている仲間だった二人もこのカップルには疲れたのだらうと悠真は思う。

そんな二人を見かねた悠真は、二人の喧嘩の仲裁に入る。

悠真「まあまあ落ち着いてください二人とも、そんなことよりあのロボットの整備を手伝ってくださいよ」

靈季「あつ、そういえば悠真君に用があつたのを忘れてたわ」

悠真「僕に用？」

すると靈季は、ジーンズのポケットから白い封筒を取り出し、それ

を悠真に渡す。

悠真「この封筒はどじで？」

霊季「なんかさつき、貴方の家の前にいた眼鏡をかけた変なおじさんから渡されたのよ、悠真君に渡してくださいって」

轟良「とりあえず開けてみるよ」

悠真「分かったよ」

封筒を開くと中には一枚の紙が入っていた。

その紙には、きれいな日本語で長ったらしく文章が書いていた。悠真は凄い速さで手紙の内容を読んでいく

悠真「……………はあ!？」

短時間で手紙を一通り読んだ悠真は、手紙の最後の文を読んで驚きの声を上げる。

轟良「どうした悠真!？」

悠真は声を震わせながら応えた。

悠真「このロボット……………ことが……………ばれた」

轟良・霊季『はあああああ!?!』

二人の声は洞窟全体に響きわたった。

轟良「おい!どじいつことだよ!?!」

轟良はなんとか落ち着こうとするも声は大きいままである。  
唯一冷静さを取り戻した悠真は手紙の内容を二人に教える。

靈季「つまり、三日前にこのロボットを起動させたときに、偶然ネルガル重工のレーダーに反応してばれたわけね」

悠真「うん、今になって思うと無闇にこいつを起動させた僕にも責任はあるんだけどね」

轟良「それでどうしろと？このロボットを戦争に使うのか？」

悠真「それなんだけど、どうやら、ネルガルの新造戦艦ナデシコのクルーとして参加しないかと書いてあるんだ」

轟良「はあ？どういうことだよ？」

悠真「どうやら、この機体は一度パイロットとして登録された人間にしか操縦できないらしいんだ、今からパイロットの変更もできないらしいし、だから、僕がこのロボットのパイロットとしてナデシコの戦力になってくれないかという事らしいんだ」

轟良「でもさ、お前はどつするんだ？話を聞く限りじゃ強制させられてるわけじゃねえんだろ」

靈季「そうよ、いくら何でも急すぎるじゃない」

いくら悠真がロボットを操縦できるからといって、悠真はまだ16の少年だ、パイロットとしてはまだ未熟だ、二人は悠真がナデシコのはクルーになるのは反対だった。

二人の言葉を聴き、悠真はもう一度手紙を読み返し、告げた。

悠真「よし決めた、この話に乗ろう」

轟良「はっ!?! どうして!?!」

悠真「僕はね、こいつが他の人間の手に渡るのが嫌なんだ、それに今のところ僕にしかこいつを動かせないんだ、まあ、それに今回の件は僕がパイロットを目指すためのいい経験になると思うし」

悠真の将来の夢は、自分が作った機体で世界を守るといっ子供らしい夢だ。だからこそ、彼はいつも前向きなのだ。

悠真「あと二人に聞きたいことがあるんだけど」

霊季「聞きたいこと?」

悠真「僕と一緒にナデシコに乗らないかな?」

轟良・霊季「……………はあああああああ!?!」

二人の声は先ほど以上に洞窟に響きわたった。

それから三日が経ち、三人は長崎県の佐世保にあるネルガル重工のドックの前にいた。

轟良「それにしてもさ、本当に来ちゃったよな……………」

霊季「そっね……………」

二人はこの三日間ずっと悠真と一緒にナデシコに乗らないかとしつこく聞いてきたためにしようがなく一緒に来た。…そもそも、二人は今のところ行く当てもないから、断る理由もなかった。

霊季「……………それにしても凄い量の荷物ね」

霊季は悠真の今の状態を観て言う。悠真は、両手にキャリーバッグを持ち、背中にはパンパンに膨らんだでっかいリュックサックを背負っている。肩には鞆を掛けていたが、それを観た轟良が持つてあげた。

ちなみに二人の荷物は必要最低限の物しかない。

悠真「いやあ、機動戦艦なんて滅多に観れないからね、カメラとかプリンターまで持つてきてしまったよ、それにしても遅いな」

三人はかれこれ30分ほど、この場にいるが、いくら待つても出迎えの人間が来ない。

昨晚の電話では、出迎えの人間が待つてしていると説明があったためこの場で待つているが、いつまで経つても迎えの人間は現れない。

轟良「…だりい、何時になったら来るんだよ」

悠真「まあまあ、そろそろ来ると思っよ、ほら」

ちょうど悠真が迎えの人間の話をしていた頃に一人の男が現れた。

プロスペクター「お待たせしました、朝倉悠真様とお連れのお二方様ですね、案内人のプロスペクターというものです」

霊季「あつ！あなたは手紙を渡したあの変なおじさん！」

プロスペクター「おや、あの時のお嬢さんですか」

霊季「何であるとき、直接悠真に会わなかったのよ」

プロスペクター「まあ、私もネルガルの人間として忙しい身で、そういうえばあの機体ですが、ナデシコに移しておりますので」安心を「

あのロボットは、ネルガルの自己負担で洞窟から出され、ナデシコに移送されたらしい。

悠真「ところであのロボットは何なんです？」

プロスペクター「それはナデシコの中で話しましょう、それと今回はあなた方以外にも、竹尾ゼネラルカンパニーのトライダーG7とそのパイロット兼社長であらっしゃる竹尾ワツ太様、コンバトラーVの操縦者たちであるバトルチームの方々、他にもGUTSから隊員の方が一人参加されておりますので」

悠真「トライダーG7!? コンバトラーV!?」

轟良「何それ？」

悠真「うそ!? コダイさん知らないの!? トライダーとコンバトラーはですね…」

霊季「はいはい、話は後でね、すいませんねお騒がせして」

プロスペクター「いえいえ、あなた方以外のクルーの皆さんも個性豊かな方々ばかりですから、別に大丈夫ですよ」



霊季（本当に大丈夫なのかしら、そんなクルーばかり集めて……）

そして三人は、プロスペクターへ連れられてナデシコのある地ドックへと入り、悠真は興奮を隠せなく写真を撮ろうとしたが、ネルガルの人間に止められた。

そして、ナデシコに入った三人は、それぞれ用意されていた個室へと行き、荷物を出したりしていた。

悠真「ちえっ、写真ぐらい撮らせてくれたっていいじゃん」

悠真は荷物を全て出し、ナデシコの中を見て回ることにした。

悠真（そついや、火星奪還作戦の為の戦艦なんだよなこれ、スーパーロボットを乗せるために、本来の1.7倍大きくなったらしいし、まあしょうがないか、ん？）

??「こりゃあすげえぜ！コンバトラーにトライダー!!あのスーパーロボットが二体も拝めるなんて、くうう、最高だぜ!!」

ナデシコの中にある格納庫へと来た悠真は、格納庫の中でやたらはしゃいでいる男が目に入った。

悠真「こんにちは、どうかなされましたか？」

悠真はその男に声をかける。

男「あ？誰だお前？」

悠真「僕は今回、『スキヤパレリプロジェクト』に参加することになりました朝倉悠真と申します、三日月兜のロボットのパイロットなんです…」

男「なんだって！お前がああのと俺のパイロットなのか!？」

悠真「(倭って名前なのかあのロボ?)はい、紫色が特徴的な甲冑ロボでしたら僕のも機体ですよ」

ガイ「やっぱりか！おつといけねえ、俺の名を言ってなかったな、俺の名は『ダイゴウジ・ガイ』！ゲキガンガーのメインパイロットだ！早速で悪いんだが倭に乗せてくれねえか！」

悠真「別にいいですけど、あれは僕以外の人が乗っても動きませんよ、僕の名でパイロット登録されていますし」

そう言つとガイは、ひどくがっかりしていたが、すぐに元気を取り戻した。

ガイ「まあ、しょうがないことだ！とりあえずよろしくな！」

ガイは右手を出し、悠真もこちらこそと自分の右手も出して握手を交わした。

そんな二人に一人の男が近寄ってきた。

「へえ、お前さんがあのと俺のパイロットかい、まだ16の子供と聞いていたが本当だったのか」

悠真は、男がメカニックだとすぐ気が付き名前を聞いた。

ウリバタケ「俺の名は瓜畑セイヤ(ウリバタケ・セイヤ)、ナデシコのメカニックさ、よろしく頼むよ、それとさっき言つたるあんた！お前さんの機体はゲキガンガーじゃねえ！エステバリスだ」

ガイ「別にいいじゃねえか博士」

ウリバタケ「博士じゃないって言っただろ！」

二人の子供のような言い争いを観て、悠真の顔に自然と笑みが浮かぶ。最初は、堅苦しい人ばかりいると思ったが楽しくやっていけそうだと、悠真は思った。

轟良「おおーい！悠真！ここにいたのか」

轟良が霊季と悠真の知らない男を連れて格納庫に来ていた。

霊季「まったく、勝手にうるついたりして、心配したんだから」

悠真「すみません、二人に言うてからにしないとね、そういえば、その男の人は誰？」

轟良「ああ、こいつか、こいつは天河明人（テンカワ・アキト）、さっきそこで雇われたナデシコのコックだ」

悠真は「さつき？」と疑問を浮かべたが、先にテンカワ・アキトが口を開いた。

アキト「アキトだよらしく、それにしても凄いなこの戦艦、スーパーロボットまで積んでいるのか」

ガイ「お前スーパーロボットに興味あるのか？なら後で伝説のアニメ『ゲキガンガー3』を一緒に観ようぜ！」

アキト「ゲキガンガーか、懐かしいな、おっとそんな話してる場合じゃなかった！ユリカを探さないと！」

アキトはそう言つて、どこかへ行つてしまった。

その後、轟良達二人も自己紹介をした、その後なぜか、ゲキガンガーのファンらしい轟良がガイと語り合い、調子に乗つたガイは、エステバリスでゲキガンガーの技を再現しようとして転倒し負傷した。少しの間エステバリスに乗れないが大丈夫らしい、悠真は呆れ、ひとまずブリッジへと行つた。

ブリッジには艦長以外のクルーが集まっていた。

ブリッジへと来た悠真に、悠真と同じ年ぐらいの少年が声をかけてきた。

ワツ太「お前は倭のパイロットの朝倉悠真だろ？俺の名は竹尾ワツ太、竹尾ゼネラルカンパニーの若社長でありトライダーのパイロットさ」

悠真「ど、どうもよろしくお願ひしますー！」

ワツ太「そんなに固まるなつて、俺が活躍したのは小学六年の時だぜ、四年経つた今じゃ仕事が少なくてよ、会社のためにも今回の計画に参加したのさ」

悠真「そうなんですか、苦勞なされてるんですね…」

ワツ太は会社の事は社員に任せ、一人で参加しているらしい。先ほどまでバトルチームもこの場にいたのだが、悠真と入れ違いで格納庫へと行つたらしい。

そして、悠真はブリッジにいる人間のほとんどに挨拶を済ませたころにブリッジに一人の女性が入ってきた。

ユリカ「みなさーん！私がナデシコ艦長ミスマル・ユリカです！  
ブイ！」

一同「……………」

ナデシコ艦長の名乗った女性『御統ユリカ（ミスマル・ユリカ）は、元氣よく挨拶をしたが、この場にいた者達は反応に困っていた。

すると、彼女の後を追って一人の男が入ってきた。彼は、女性と何か話をして一同の方を向いて言った。

ジュン「失礼しました、彼女は正真正銘ナデシコの艦長で、僕が副長の葵ジュン（アオイ・ジュン）です、皆さんよろしくお願いします」

一同は、真面目そうな『アオイ・ジュン』が言うのなら大丈夫だろうと納得した。

その時、艦内に警報が鳴り響いた。

悠真「!?」

ルリ「木星トカゲ起動兵器が出現、施設上空にて連合軍と交戦中です」

ナデシコのオペレーターである少女『星野ルリ（ホシノ・ルリ）』が状況を説明する。

悠真「なんだって!」

場所は変わって、佐世保ドックへと急行する一つの黒い戦闘機があった。

その名は『ガッツウイングブラックソウル』怪獣との戦闘用に改造されたライドメカ『ガッツウイング』の最新鋭機である。

そして、そのパイロットであり、GUTS新隊員の『セキシマ・ホムラ』は、木星トカゲが佐世保ドック上空へと出現したことを知らされ現場へと急行していた。

ホムラ「まったく、木星トカゲの連中かよ、かったりいな」

ホムラは、GUTS代表としてスカパレリプロジェクトに参加すると隊長の『イルマ・メグミ』に命令された。彼女曰く、優れた戦闘技術を持つホムラが適任だったらしい。隊長は今回の任務のために、最新鋭のガッツウイングをホムラに与えてくれた。彼も、今回の任務には反対ではなかったが、まさか、いきなり木星トカゲと戦う羽目になるとは思わなかったのだ。

そして、施設上空へとたどり着いた彼を迎えたのは、木星トカゲの小型無人兵器、通称『バッタ』である。

ホムラ「一匹残らず破壊する！」

ホムラはガッツウイングは、ニードルガンやミサイルで次々とバッタを破壊していく。このガッツウイングは、対ディスプレイションフィールドの装備が施されているのでフィールドの無いバッタなどは敵ではない。

その時だった。

???「ぶっ飛べえっ！」

エステバリスのワイヤードフィストが飛んできてバッタを破壊、さらにそのままホムラのガッツウイングに拳が衝突した。機体は大きく揺れ、ホムラは、エステバリスのパイロットと通信を繋げる。

ホムラ「おい貴様！気をつける！」

アキト「え!?今の当たった!?すみません!」

エステバリスに乗っていたアキトはホムラに謝る。ホムラは、明らかに軍人に見えないアキトを観て言った。

ホムラ「貴様民間人だろ!なぜ民間人がエステバリスに乗ってる!」

アキト「そ、それは…」

ホムラ「まあいい!話は後だ、一気に叩くぞ!」

アキト「はい!」

二人は、バッタへと攻撃する。ホムラはエステバリス以外のロボットに気が付いた。

??「食らえ超電磁ヨーヨー!」

超電磁ロボのコンバトラーVである。ホムラはコンバトラーのパイロット達と通信を繋げる。

ホムラ「俺はGUTSのセキシマ・ホムラ、味方だ、この馬鹿みたいに俺を攻撃するなよ!」

??「こちらバトルチームの『葵豹馬』、助太刀感謝するぜ!」

ホムラ「では、こんな奴らとつとと倒すか!」

ガッツウイング・エステバリス・コンバトラーの活躍でほとんどのバッタは倒された。

だが、メンテナンス中だったコンバトラーのエネルギーはほとんど無く、最新のガッツウイングやエステバリスも次々と増える敵に対して徐々に不利になる。

ホムラ「チツ、ミサイルも残ってねえしブレイクガンもエネルギーがほとんど残ってない、さあて、どうしたものか……」

その時、海の中から巨大な陰が現れた。

アキト「あれはナデシコ！」

そう、戦艦ナデシコだ。なぜ、このタイミングで現れたのかというと……。

ユリカ「アキト！皆さん！お待たせ！」

その場で戦っていた全員の視線にユリカの声が響きわたる。

アキト「お待たせてこのタイミングで……」

ユリカ「そうなの！あなたのために急いできたの！」

アキト達「……………」

これがその理由である。

海に集まっていたバツタ達はナデシコへと向かおうとする。

ホムラ「馬鹿な連中だ、ナデシコに突っ込むとは」

ルリ「敵残存兵器、有効射程距離内に入りました」



ユリカ「どかーんと一発いきましょー！グラビティブラスト発射」

ナデシコの主力武装である重力波の主砲『グラビティブラスト』が放たれ、あれほどたくさんいたバツタ達は一匹残らず消え去った。

その後、彼らはナデシコに乗艦し、最低限の自己紹介を済ませた。ちなみにエステバリスに乗っていたアキトは、偶然エステバリスに乗ることになったらしく、戦いは素人らしい、ナデシコの艦長ミスマル・ユリカとは幼なじみらしく、ナデシコに戻った直後は、彼との再会を喜ぶユリカの言葉が回線に響き渡り、その場いいた全員が呆れていた。

その後、ナデシコ宇宙空間に出て、手の空いたクルー達は、夕食を取りながら他のクルー達と交流を深めていた。

そんな中、ホムラはある二人の存在が気になっていた。

轟良「おい、さっきからこっちに眼を飛ばしているようだが、俺達に何か用か」

ホムラは轟良と霊季の存在が気になっており、食事中ずっと彼らを睨みつけていた、それに気が付いていた轟良はホムラに声をかけた。

ホムラ「では単刀直入に聴かせて貰う、貴様らは何者だ？」

轟良「!？」

轟良はホムラの言葉に驚愕した、ホムラは彼らしか知らない何かを知っているのだ。

ホムラ「後で俺の部屋に來い、そこで話をしよう」

そう言ってホムラは、部屋へと戻っていった。

靈季「…轟良、あの男はまさか…」

轟良「まだ確定した訳じゃない、とりあえずあいつの部屋へ行こう」

二人はホムラを追っていった。

悠真（ん？二人とも何処に行くんだろう？）

悠真は、焦った顔つきの二人が食堂を出ておくのを眺めていた。

そして、ホムラの部屋にやってきた二人に対してホムラが放った言葉は二人を驚かせた。

ホムラ「まさかこの戦艦に人の姿をした怪獣が二人も紛れ込んでいるとはな、人間の姿をしているからさっきまで気づかなかったぜ」

二人「!？」

ホムラ「そう恐い顔するな、俺は別に貴様らの命を狙っているわけではない、人間になった方法もどうせどっかの異星人の技術でどうにかしたんだろ、それに俺も人間ではないしな…」

轟良「…なに？…じゃあお前は一体？」

ホムラ「ある奴を捜しててな、この星に来たんだ、怪獣は俺の専門だが貴様らは人間と友好的らしいしな、貴様らがその姿になったのはあえて手を出さないでやろう」

ホムラはグラスに酒を入れ一気に飲み干す。

「靈季「本当に私たちを信じるの？」

「そう言う靈季に対して厳しい顔つきになったホムラが言った。

ホムラ「勘違いするな、もし何かよからぬ事をしたら何時でも殺してやるからな、覚悟しろよ」

ホムラの強気な態度に轟良は笑みを浮かべながら応える。

轟良「大丈夫さ、俺たちはそんなことはしない、それと悪いんだが、こいつらを知らないか？」

轟良は写真を出しホムラに見せる。

そこには、グレーの髪を持つ小さな少年と緑がかった黒髪を持つ青年が写し出されていた。

ホムラ「こんな奴らは知らないな、こいつらも貴様らと同じ」

轟良「そうさ、俺たち二人と同じ怪獣さ、黒い方は一人でも大丈夫だが、もう一人の奴はまだ小さな子供だからな、人間の言葉もうまく話せないんだ」

ホムラ「そうか、では知り合いに創作を頼んでいこう、なんかの不注意で取り返しの付かないことになってしまっただけは大変だからな」

轟良「そういえばお前は何者なんだ？ 異星人か何かか？」

轟良はホムラの招待が気になっていた、自分たちと同じ怪獣には見えないが、明らかに強大な力を宿しているのを感じていたのだ。

ホムラ「まあそんなもんさ、それより貴様らはなぜ人間と共に行動

をする？」

ホムラは、なぜこの二人が人間と行動しているのかが気になって仕方なかった。

轟良「霊、こいつになら言っていないだろ？」

霊季「そうね、教えてあげるわ、私たちの目的を」

霊季はホムラに自分たちの目的話した。

それはとてもシンプルで難しいこと、そう、怪獣と人間の共存だ。

そもそも霊季は轟良などとは違い異星人によって育てられた怪獣で地球人のスーパーロボットなどと戦うために戦いに特化した能力を加えられた。

だが、彼女を育てていた異星人は母星へと帰還し、彼女は地球へと取り残された、そんな彼女を拾ってくれたのが轟良の父親だった。

轟良とその父は現代まで生き延びている恐竜が、独自に進化した怪獣で彼らは人間に恐れられていたが、轟良の父はそんな人間に自分達と怪獣のことを解ってもらいたいと考えていて、轟良と霊季に人間達と共に生きよと教えた。

轟良の父は人間を襲う怪獣との戦いで人間を庇って死んだ、二人はそんな彼の願いを受け継ぎ世界中を旅して仲間を捜した。

そして彼らと意思を共にする二体の怪獣に出会い、彼らと共に異星人の使っていた装置を発見し、その装置で人間の姿を得たらしい。

だが、一ヶ月前に日本へ来る途中に太平洋上で巨大な竜巻に遭遇し、二人と離ればなれになってしまったのだ。

そして二人を捜しているうちに悠真の家の近くを拠点にすることになったらしい。

ホムラ「大体解った、もし何かあったら俺に伝える、どうせほかの奴は信用しないしな」

靈季「ええ、そうするわ、部屋に戻りましょう轟良」

轟良「おお」

部屋を出ていこうとする二人を観たホムラは、ふと思った事を口にする。

ホムラ「怪獣のお前らに対して変な質問かもしれないが聴いておく、………貴様ら付き合っているのか？」

二人「!!？」

二人はホムラの言葉に顔が紅潮する。

靈季「な、なな！何言ってるのよ！誰がこんな馬鹿と！」

轟良「言ったな靈季！俺もお前のような阿婆擦れなんか願ひ下げだ！」

靈季「誰が阿婆擦れよ！誰が！」

ホムラ「貴様らとつと部屋に帰れ!!」

ホムラは二人を部屋から追い出した。

ホムラ「まったく、馬鹿ばかりだ」

ホムラはその後、友人に轟良達が言っていた二人の搜索を頼み、G UTSへと現状報告を済ませ寝ようとしていたが…。

??? 『ジャワアアアアア!』

ホムラ「!?」

突如、彼の頭に怪獣らしきものの咆哮が響き渡った。それと同時に艦内に警報が鳴り響く。

ホムラ（やっぱりか!）

ホムラは大急ぎでブリッジへと向かう。

ホムラ「おい!何があったんだ!」

プロスペクター「どうやら怪獣が出現したようです、しかも世界中に」

ホムラ「世界中!」

豹馬「おい!怪獣だって!?本当か!」

ホムラに続いてバトルチームが入ってきて、五分後全員が揃った。

ワツ太「それでどういうことなんだ怪獣が世界中に現れたって!」

地球に残った社員や家族が心配なワツ太は落ち着きを無くしながら言う。

ホムラはそんなワツ太を落ち着かす

ホムラ「冷静になれ社長さん、他の奴も同じ気分なんだ、さあプロスペクターさん説明してくれ、今の世界の状況を」

プロスペクター「はい、先ほど地上と通信が入り、モンゴル、イースター島そしてアメリカ・アフリカ・ヨーロッパ、そして日本に立て続けに怪獣が、それ以外の国々にも謎のアンノウンが出現したらしく、世界中の軍がそれらの対応に追われているそうです」

ジュン「だから今回のプロジェクトに反対だった軍がナデシコを追ってこなかったのか…」

アキト「そんなことより地上に戻らないと！地上の人達が危ない！」

アキトは火星のコロニーに住んでいたが、木星トカゲの攻撃で地球へと飛ばされた、そしてその地球が火星のような危険な状態にあるのを見過ごせなかったのだ、だが、そんな彼をホムラが止めた。

ホムラ「駄目だ、俺達は火星に向かわねばならない」

アキト「あんたは地上の人達が心配じゃないのかよ！」

ホムラ「いい加減にしろこの素人が…地上の人間には助けしてくれる軍がいる………だがな、火星にいる人間にはその軍がない、だから俺達は火星へ行かなければならない、地上に戻りたい奴は勝手に戻れ！俺は一人になっても火星へ行く」

アキト「……！」

真面目そうなホムラの口からこんな言葉が出るとは思わなかったアキトは言葉を失った。

ホムラ「それに地上にはスーパーX3やスーパーロボットがいる、そう簡単には人類は負けない、俺達が戻らなくても大丈夫だ」

ユリカ「あ…あのお」

ホムラ「すまない艦長、つい熱くなっちゃった」

ユリカ「い、いえ別に！そんな事より早く火星へ向かいましょう！」

ホムラ「ああ、そうだな

…」

その時、また警報が鳴った。

悠真「今度は一体何なんだ!？」

ルリ「前方にデイメンションホールが出現、ホール内から多数のアンノウンが出てきます」

デイメンションホールとは、謎に包まれた次元断層で地上、空中、宇宙空間関係なく出現し、何も出てこなければいいのだが、近年そこから未知のアンノウンが出現する事が増えた、そのためデイメンションホールの生体反応を感知する装置などが作られたのだ

ホムラ「くそ！こんな時に戦闘になるとは、貴様らいくぞ！」

豹馬「任せろ！」

ワツ太「へっ、どんな奴らが来ても俺たちの相手じゃないぜ！」

ホムラはバトルチーム・ワツ太と共に格納庫へと向かう。

霊季「艦長いいのかしら、彼らを行かせちゃって」



ユリカは笑顔で答える。

ユリカ「大丈夫です彼らなら！もし何かあってもナデシコで援護しちゃいます！」

アキト「俺もいくよ、不安なところもあるけどあの人の言葉を聞いたら頑張れる気がしたんだ」

ユリカ「頑張ってアキト！あなたは私の王子様なんだから！」

アキト「な、何言ってるんだこの馬鹿！俺はいくぞ！」

アキトは格納庫へと向かった。

ガイ「俺もいくぜ！スーパーロボットと共に戦える機会なんて滅多にないからな！」

ガイは負傷した腕を回しながらアキトの後を追った。

プロスペクター「そういえば悠真さん、あなた様の機体『倭猛零式』ですが戦闘に出られるようにメンテナンスが完了しましたがどうなされますか？」

悠真「あの機体で戦えるんですか！」

プロスペクター「一応は、ただ装備が専用の太刀二本と背部にある二門の光粒子機関砲ぐらいしか使えないんですよ、他の装備は火星に着くまでには完成させる予定でしたから」

悠真「それだけで充分です！僕も出ます！」

轟良「おい悠真！模擬戦じゃないんだぞ！解っているのか！」

轟良は悠真を止めようとした、確かに悠真は学校の模擬戦じゃないもトップだが実戦はそんな甘いものじゃないからだ。

悠真「安心して轟良さん、もし何かあったらすぐにナデシコに戻ってくるから」

悠真はそう言ってブリッジを出て格納庫へと向かった。

轟良「悠真…」

轟良はただ彼の背中を観ることしかできなかった。

そして、ホールから出てきたアンノウンとホムラ達との戦闘が始まった。

アンノウンは小型の虫のような生命体で一匹一匹は小さいが数がとても多く、ガッツウイング・トライダー・コンバトラーは苦戦していた、どの機体もメンテナンスが完全ではなく、ガッツウイングとコンバトラーは先ほどの戦闘でミサイルなどを多く消費し補給もほとんどされていない。

十三「どうするんや豹馬！このままじゃ埒が明かんで！」

バトルチームの一人『浪花十三』はこのままじゃいくらコンバトラーでも危険だと感じていた。

小介「こうなったら超電磁スピんで一気に倒しましょう！」

バトルチーム一の頭脳を持つ『北小介』の作戦はコンバトラーの『超電磁タツマキ』でアンノウンの群れをタツマキで磔にし、コンバトラーの必殺技『超電磁スピン』で一気に倒すものだった。

豹馬「よし任せろ！皆は奴らを指定した場所に集めてくれ！」

ホムラ「解った！いくぞ貴様ら！」

ワツ太「OK！こっちだ虫共！」

ガイ「了解！いくぞコック！」

アキト「お、おう！」

四人の機体はアンノウンの群れを挑発、そのままコンバトラーの指定した場所まで誘導した。

ちずる「今よ豹馬！」

バトルチームの紅一点『南原ちずる』は豹馬に合図する。

豹馬「いくぞ！超電磁タツマキ！」

アンノウン『ギギイ!?!』

アンノウンの群れはコンバトラーの超電磁タツマキで磔にされる。

豹馬「止めだ！超電磁スピン！」

アンノウン『ギギヤアアア!?!』

アンノウンの群れはコンバトラーの超電磁スピンのほとんど倒された。

アンノウン「ギギイ！」

生き残ったアンノウンは攻撃後で隙のできたコンバトラーへと特攻しようとする。

豹馬「しまった！」

アンノウン「ギギイ！」「くらえええっ！」「ギギヤア!?!」

ホムラ以外『!?!』

アンノウンはコンバトラーの目の前で、何者かによって切り刻まれた。

悠真「大丈夫ですか皆さん！」

それは悠真の動かす倭猛だった、倭の両手に握られた太刀がアンノウンを切り刻んだのだ。

豹馬「すげえぜお前！本当に実戦初心者かよ!?!」

悠真「いえ、これは僕一人じゃなくて…」「貴様ら！まだ来るぞ!?!」

ホムラは地球の方から来る何かを感じ、気の抜けた悠真達を注意した。

アキト「来るって何が？」

その時、ナデシコから通信が入った。

ルリ『皆さん、地上から三匹のGモンスターが宇宙へ向かったと報告が入りました』

ホムラ以外『!?!』

『Gモンスター』とは、四年前に東京でゴジラがメルトダウンを起こしたときに放射能と共にゴジラの体から放出されて世界中へと散らばったG細胞を取り込み怪獣へと変貌した生物達のことを指す。

最初に確認された個体はイグアナが変貌した怪獣でアメリカで暴れまわり、最終的にはミサイルで倒された。

だが、この怪獣より凶暴な怪獣は世界中で出現し、スーパーロボットなどによって倒された。

今回世界中に出現した怪獣達もGモンスターだと思われる。

そして、宇宙空間へと出たGモンスター達はナデシコやコンバトラー達を睨みつけた。

一匹は鮫と恐竜を合わせたようなGモンスターで両手のヒレと巨大な背びれを揺らしている。

そして、その個体の両側にいる個体は両方海蛇型で違いは片方が尾の先が鎌のようになっているのもう一方は尾の先が棘の付いた鉄球のようになっている。

鮫型「ジジャアア……」

海蛇型「ギキイ……」

ワツ太「どうする…今の状態じゃあいつらの相手をするのはきついでぞ」

ホムラ「ひとまず作戦を…」  
「うわああああ!!」  
「おい朝倉あ！勝手に突っ込むな！」

倭は太刀を構えてGモンスター達へと突っ込む。  
それを見たホムラはガッツウイングで悠真を追う。

悠真「くそ！何やってんだよお前！うわああ！」

倭は悠真の意志で動いている訳じゃなさそうだが暴走してるようにも見えない。

鮫型「ジジヤワアアア！」

鮫型は口から青い光の球を吐き出し倭めがけて撃ってきた。

倭「うわああああああ!!」

轟良「悠真ああ！」

轟良はナデシコの中で彼の名を叫ぶしかできなかった。

悠真（あれ……僕死んじゃったのかな？………それにしても意識

が……………!?)

倭のコックピットの中で目を覚ました悠真は目を疑った、悠真の目の前に観たこともない何かがあったからだ。

アキト「あ…これは巨人？」

豹馬「か、かつこいい…」

ワツ太「す、凄い迫力だ…」

倭の目の前に立つ橙色と銀色の巨人は静かに攻撃の構えをとる。

巨人「ズイアッ！」

炎の巨人『ウルトラマンイグニス』がここに降臨した。

## 第四話 大きな問題

イグニス「ズイアッ！」

銀色と橙色の巨人ウルトラマンイグニスは攻撃の構えをとる。

海蛇型「ギキイイイイ!!」

海蛇型の怪獣はイグニスへと突撃しそのまま絡みついた。

悠真「あっ！巨人が！」

海蛇型「ギキキッ！」

もう一匹の海蛇型もイグニスに絡みついて締め付ける。

十三「どうするんや豹馬！あの巨人やられてしまっで！」

豹馬「いや！よく見る！」

海蛇型（×2）『キギィアアア!!?』

巨人に絡みついていた海蛇型Gモンスター（以下GM）が突然体に火がつき燃えだしたのだ。

イグニス「ズオオオオアア……！」

体内の温度を急上昇させて体外へと解放しそのエネルギーで体にとまわりつく物体を燃やすイグニスの能力『ヒートボディ』だ。



海蛇型（×2）『ギシャアアア………!!』

二匹は完全に燃え尽きて骨も残らずに灰と化した。

悠真「す……凄い……！一気に二匹も倒すなんて……」

鮫型「ジャワアア！」

鮫型はイグニスに向かって体当たりを仕掛ける。

イグニス「ズオアッ！」

しかし、鮫型の体当たりはイグニスの左手で受け止められた。

一同『!!?』

鮫型「ジャワアッ！」

鮫型は巨大な口でイグニスの右手に食らいつき鋸のように鋭利な歯で右手を食いちぎろうとした。

イグニス（………かかったな！）

イグニス「ズイアアア！」

鮫型「ジャウィツ!!?」

鮫型の体が赤く輝く。

鮫型は突如イグニスの右手から口を離した。

アキト「何があったんだ？」

悠真「どつやら内側から溶かされかけたそうですね」

アキト「はっ!?何を言ってる…」

悠真「あのGMの歯を観てください、明らかに先ほどと形状が違いますから」

アキト「歯?……………なっ!？」

アキトは驚愕していた。

なぜなら、イグニスを食べちぎろうとした歯が蠟燭のように溶けていたのだ。

鮫型「ジャジイイ!」

触れた物を体内の超高熱を放出して溶かすイグニスの能力『ヒートソニック』である。

イグニス「ズオオオアッ!」

鮫型「シャジイツ!」

イグニスの右手から放たれた炎が蛇のような形状をとり鮫型を拘束する。

イグニス「ズオオオオオオオオ……………」

炎の巨人は両手を に構えて両手にエネルギーを集中させる。

ルリ『皆さん、巨人から発せられるエネルギーが急上昇してきます、

その場から退避してください』

ワツ太「しまった！朝倉あ！早くその巨人から離れるんだあ！」

ワツ太の声は悠真に聞こえていたが悠真は放心状態で身動きがとれなかった。

イグニス（安心しろ、その場にいれば吹き飛ばされはしない）

イグニスの声が悠真の頭の中に伝わる。

悠真（!!?今、巨人の音が頭の中に!!?）

イグニス「ズオオオアアアア、ズイア！」

イグニスの必殺光線『バニシウムシユート』が鮫型めがけて放たれる。

鮫型「ジジャアアアアアアア!？」

鮫型はバニシウムシユートの直撃を受けて爆散する。

イグニス「……………」

豹馬「あの化け者共を一人で倒しやがった……………」

悠真「……………あ、ああ」

悠真に倭の目の前に立つイグニスの姿を見て言葉を失う。

イグニス「……………」

イグニス「は黙って倭の姿を確認する。  
そして……」

イグニス「ズイアッ！」

倭「うわっ！」

イグニスは赤い光を放ち、自分の体を光で包む。

アキト「今度は一体なんだよ！」

アキト達は武器を構えたが、イグニスの放った光は自然と消えてそこにイグニスの姿は無かった。

ガイ「なっ!?あの巨人何処に行きやがった!？」

ちずる「ルリちゃん巨人は!？」

ルリ「巨人の反応消失しました」

豹馬「はあ!?一体何処行っちゃったんだよ！」

巨人の反応消失でパニックになった一同を一人の男の大声が落ち着かせた。

ホムラ「おい貴様ら!敵はいなくなっただ、とっとと帰艦しろ！」

倭のコックピットに乗っているホムラだ。

ワツ太「ホムラさん無事だったんですか！」

ホムラ「ああ、なんとかな、ガッツウイングが動けなくなったところを近くにいた朝倉に拾われてな、とりあえず貴様らはナデシコへと戻れ、俺はこいつに用があるんだ」

ワツ太「了解、皆戻るぞ」

ワツ太が豹馬達を先導してナデシコへと戻っていった。

そしてホムラは彼らの機体がナデシコへと帰艦するのを確認して通信回線を切り、倭をゆっくりとナデシコへと向かわせる、

ホムラ「……さあ、今のうちに説明してもらおうか、この機体がGMに突っ込んでいったわけを」

悠真「そ、それはなんと説明していいやら……」

???『それは俺が説明してやるよ!』

ホムラ「!?」

倭の機内に第三者の音が響きわたった。

数分後、倭も機体の一部を損傷したガッツウイングと共に無事帰艦した。

それぞれの機体から降りてきた一人はいきなりプロスペクターに詰め寄った。

ホムラ「おいプロスペクターさん、なんなんだあの機体は、あんなのが搭載されてるなんて聞いてないぞ!」

プロスペクター「おや、そういえば説明をしませんでしたね」

悠真「おや『じゃないですよ！こっちは危うく死にそうになったのに！』」

ガイ「おいおい、どうしちゃったんだお前ら？」

小介「今この機体に何か搭載されている言いましたね、もしか先ほどの倭の動きと関連が？」

悠真「そうなんだ！まったくあいつのせいで機体が自由に動かせなかったんだ！」

アキト「あいつ？お前の機体は一人乗りの筈だろ、ホムラさん以外に人なんて乗って…」

プロスペクター「そこからは私から説明いたしましょう」

ホムラ「やっと言う気になったか」

プロスペクター「まさか、あのような事になるとは思いませんでしたからね、ではまず、倭猛零式について話す前に『超鋼装機計画』について話しましょう」

パイロット達「超鋼装機計画？」

プロスペクター「はい、超鋼装機計画とは、対異星人や戦争などの様々な戦場での戦いに特化した機体を生み出す計画です、倭を合わせて五体の機体が存在してたのですが……」

ホムラ「してた？まさか倭以外の機体はもう存在しないのか？」

プロスペクター「いえいえ、そんな事はありません、ただ、倭以外の機体はパイロットの方々と共に行方不明で……」

悠真「行方不明!? どういうことですか!？」

プロスペクター「私もあまり詳しくは知らされてないのですが、超鋼装機のパイロット達の部隊のうち隊長一名と隊員二名が任務中に突如の失踪、それを追って残された隊員二名も彼らの行方を追ったのですが、彼らも消失したのですよ、そして朝倉さんより前の倭のパイロットの方も不完全な倭を残して別の機体で彼らを追って、彼までもが行方知れずになりました、そして、倭も彼らを追って単独で彼らを捜索しに……」

ワツ太「ちょっとまってくれよ！単独って、そんな時にこいつに乗ってたパイロットはどうなったんだよ!?悠真が見つけたときも誰もいなかったってさっき聞いたぞ！」

悠真「……いや、そもそもこいつには人が乗ってなかったんだ、こいつ自体が単独で行動してたんだ」

ナデシコクルー『?』

この場にいるほとんどのクルー達は悠真の言っていることを理解していなかったが、ホムラとウリバタケと小介、そしてプロスペクターは気づいているようだった。

そしてホムラは、倭の方を向いて大声を発した？

ホムラ「ったく、いい加減に貴様から喋ったらどうだヤマト……」

ナデシコクルー『ヤマト!?!』

ナデシコクルーは困惑していた。

なぜなら『ヤマト』という人間はクルーの中にはいなかったはずだからだ。

アキト「おいーヤマトって誰だよーこのロボットに誰か乗ってるのか!?!」

そんなアキトの問に対して、ホムラは気難しそうに答える。

ホムラ「ああ…なんとはいいいんだろっな…乗ってるというより積んで…」

???『あああああ!もう長ったらしいな!解ったよ話しゃあいいんだろ!』

ナデシコクルー『!!!?』

ナデシコクルーは突如として倭のスピーカーから聞こえてくる声に驚く。

ホムラ「うるさいぞ、ポンコツAIE!静に喋れないのか!」

???『誰がポンコツだ!俺が助けてやらなけりゃ宇宙空間に残されてたくせに!』

ナデシコクルー『……………』

凄くシュールな光景だった。スピーカーから聞こえる声とホムラの口喧嘩はとても不思議な光景だった。



ふと、ワツ太はホムラの発言であることに気が付いた。

ワツ太「あんた今、AIって言わなかったか？じゃあ今喋ってるのって……」

ホムラ「そうだ、倭に積んである自称『超高性能AIヤマト』だ、凄く五月蠅くて耳に触る」

ヤマト『自称じゃないって言っただろ！そんなことより！そうさ！この俺こそがヤマトの機能を支えるハイパーアルティメットAIヤマト様だ！どうだ驚いたか！』

一同『……………』

全員無反応だった。

そして納得した、確かにこんな馬鹿AIならGモンスターに突っ込んでもおかしくないからだ。

ホムラ「こいつはパイロットのサポートと機体の制御などの様々な役割があるんだが、肝心の中身がこれだから、消息不明の仲間を自分だけで探しに出たら、エネルギー切れで洞窟に身を隠すことになり、パイロットから操縦権を奪い、明らかに勝ち目のない敵に突っ込んだりする馬鹿だからな、まったく情けないな」

ヤマト『……………すいませんでした』

ヤマトが倭を動かして土下座した。

一同『何だこの光景は……』

ホムラ「とりあえずこの話はこれで終わりだ、とっとと火星へと向

かわないとまたGモンスターみたいな連中に襲われるぞ」

そう言っただけでホムラが格納庫を後にしようとしたときだった。

悠真「ちよつと待つてくださいよ！こいつの事もだけど、それよりもさっきの巨人については何も話さないのですか！」

悠真のその言葉で、一同は先ほどの巨人について思い出す。

小介「そうですね、倭についてはある程度の事は解りましたが、あの巨人については味方なのかも知りませんでしたからね……」

ホムラ「あの巨人なら大丈夫だ、俺達に危害を及ぼすことは無いだろう」

ホムラはめんどくさそうに答えた。

アキト「は!?何言っただあんな!?そんな簡単に解るわけねえだろ！真面目に考えるよ！」

ホムラ「じゃあ聞くが、貴様はその巨人がどう見えた？俺達を殺そうとする悪魔にでも見えたのか？」

アキト「！……悪魔なわけないだろ！だってあの巨人は朝倉を助けたじゃあそれでいいだろ」え？」

ホムラ「貴様らがどう思うにしろ、巨人が朝倉を助けたことには変わりない、俺は巨人を信じる」

一同『……………』

そう言っただけで、格納庫から出ていった。

一同はそんなホムラに声をかけられなかったが、轟良と霊季はホムラの方を睨みつけて、何かを考えていることだった。

その後、ナデシコの艦長ユリカは地上にいる父『御統 コウイチロウ（ミスマル・コウイチロウ）』司令と連絡を取るも、どうやら、世界中に出現したGモンスターを討伐の指揮を執るため自ら前線に出ているらしく、コウイチロウが残したメッセージから、ナデシコに三人の補給パイロットが来ること聞き、月の機動近くへとナデシコは留まっていた。

ホムラは自分の部屋で、思い悩んでいた。

ホムラ（いつになったら火星へ行けるんだ、火星には奴らの手がかりがあるというのに、もし、火星の人間があれと関わりと生きては帰れないだろうからな、くそ！俺の身体が完全だったら独りで奴らを潰しに火星へ！）

その時、部屋の扉が開き、轟良が入ってきた。

ホムラを睨みつけながら言った。

轟良「……おい、話があるんだが、俺達の部屋へ来てくれないか」

ホムラ「こんな時間に話か………今俺はそんな気分じゃ……」「ウルトラマン」!?今なんと言った!」

轟良「……その反応からしてやっぱりお前がさっきのウルトラマンか、霊季の言った通りお前がGモンスターを倒したウルトラマンなんだな」

ホムラ「…どうせ、貴様達にはすぐに感じられると思ったが、なぜウルトラマンの名を知ってる……？」

霊季「それは、私が私を生み出した異星人から教えられたからよ」

轟良「霊季！」

いきなり現れた霊季の姿に轟良は驚く。

ホムラ「俺の了承無しに人の部屋に入ってくるとは、いい度胸だな…」

霊季「轟良一人じゃ、あなたを連れ出せないでしょうから、私直々に来たのよ、それで、あなたは本当にウルトラマンなのよね？」

ホムラ「？貴様は俺がウルトラマンだと気が付いているのではないのか？」

霊季「なんか私が教えられたウルトラマンの情報じゃ、怪獣を基本的に敵視しているってきいたからよ、私の予想じゃ、私達の正体が解いたらすぐに殺してもおかしくないと思ったからよ」

ホムラは霊季の発言を聞いて、何かを思い出す。

ホムラ「それは違う世界の宇宙のウルトラマンだな」

二人「はい？」

二人はホムラの言っていることがよく理解できなかった、そりゃそうだ、別世界の宇宙なんてわけがわからないことを言ってるのだから

ホムラ「簡単に説明すると、貴様が言っているウルトラマンは、別世界、まあ異世界でもなんでもいい、ようするに我々が知る宇宙とは全く違う別世界の宇宙で宇宙の平和を守っている連中のことだ、俺の種族はそういうウルトラマン達とは違い、自分達の宇宙だけを守っていたからな……」

霊季「そついえば、私を地球へと連れてきた異星人は、『この地球ならば我らの物になるだろう』とか言ってたけど、私がいた宇宙はウルトラマンのいた宇宙だったのかしら……?」

ホムラ「さあ、俺に聞かれても困る、それよりも、他に用が無いならとっとと部屋から出て行ってもらおうか」

轟良「いや、まだ肝心なことを聞いてない、お前は、なんで地球に来たんだ? ……自分達の宇宙だけ守っていたという言い方からして、お前のいた宇宙は……出ていけ! ……なっ!」

ホムラ「今すぐこの部屋から出ていけ! お前らに話すことはない! 地球人だろうが、怪獣だろうが関係ない! 早く出ていけ!」

ホムラから放たれる殺気に二人は、一目散に部屋を出た。

轟良「急にどうしたんだあいつ!? 大声で怒鳴りやがって!」

霊季「部屋に戻りましょう轟良、彼には話せない……話したくない事情があるのよ」

轟良「……………」

たとえどんな事でも話せないことがあるのは轟良にも解る。

轟良はホムラからは殺気と共に彼の瞳から悲しみを感じていた、だから、彼は何も言わずに霊季と共に部屋へと戻っていった。

そして、ホムラはというと、右手に銀色のペンダントを持ち、ペンダントの中を開いた。

ホムラ「…父さん…母さん……フレリア…俺は馬鹿だよな、すぐに感情的になって怒鳴ったりして……」

ペンダントの中から、ライターのように炎が出現し、そこにはホムラの亡き家族である両親と妹のフレリアが映し出されていた。

ホムラ「…今度こそ二人の仇を取って、フレリアを取り戻してやるからな……！」

アキト「……………」

偶然、ホムラの部屋の前に来ていたアキトは彼の言葉を聞き、彼が亡き家族のために戦っていることにその覚悟の大きさを感じた。

アキトも、火星で両親を亡くしている、だから、家族を失う気持ちには解るのだ。

アキト（そうだ、俺達は行かなければならない火星へ！そのためにも！俺は自分ができることはやるんだ！）

それから、半日が過ぎ、補給パイロットの三人もナデシコに乗艦し、ナデシコはやっと火星へ向けて発進した。

それから、二日が過ぎた。

悠真の駆る倭は、荒れ果てた大地に立ち、目の前の蜥蜴型GMに背部にある二門の光粒子機関砲の照準を向けていた。

悠真「ヤマト機関砲を使う！目の前の敵に向かって撃つぞ！」

ヤマト『おらあー！任せろ！全部もってけええええええ!!』

二つの機関砲から、ありったけの光弾がGモンスターへと放たれる。

GM「ギシャアアアアア!？」

大量の光弾を喰らったGMは爆散する。

ヤマト『よっしゃあ！俺に任せれ！馬鹿野郎！なにやってんだ！』  
へっ?』

悠真「敵はまだいるんだぞ！それなのに貴重な弾を全部消費する奴があるか！」

今の攻撃で、倭が機体内で生成できる光弾の残数はほとんど無くなっていた。

ヤマト『ゲッ!?どうすりゃあいいんだよ!』

悠真「お前のせいだろ！どうしてくれるんだよまったく！」

ヤマト『こつなったらやけだ！あんな連中俺だけでぶっ倒してやるぜ！』

ヤマトは強引に悠真から操縦権を奪い、両手に刀を持ち、敵に特攻する。

悠真「おい！馬鹿！やめろ！ってっわああああああ!!？」

ホムラ『ストップ！ここまでだ！』

トレーニングルームにいるホムラの声が聞こえたとともに目の前の敵が突如消え、悠真の乗るシュミレーターの画面は真っ暗になる。

悠真「はあ……疲れた」

ホムラ「だてにパイロット目指してないな貴様は、判断力は良いぞ」

悠真はシュミレーターから出て、ホムラからタオルとスポーツドリックを受け取る。

二人「問題は……」

ヤマト『おいホムラ！何で止めたんだよ！もう少しで倒せたのによ！』

トレーニングルームの巨大スピーカーからヤマトは怒鳴り散らかす。

ホムラ「黙れ、貴様はあの時の特攻からなにも学んでないらしいな、貴様一機が自爆するならいい、だがな、こいつが乗っていることを忘れるなよ、そのままで戦場に出たら敵のいい的だ、試しに俺のガッツ



ウイングと戦ってみるか？ 貴様一機倒すぐらい、一分もいらん」

ヤマト『なんだと！ 俺があんたに負けるわけないだろ！』

やたら騒ぐAIだと二人は思っていた。

??? 「あーあ、またかよ、いつも五月蠅いな」

トレーニングルームに入ってきた三人の女性のうちの一人がヤマトの様子を見て呆れる。

ホムラ「ようお前ら、シュミレーターならちよつど空いたぞ、朝倉がこの馬鹿AIのせいでひどい戦いをするから俺が止めたんだ」

ヤマトはさらにギャアギャア騒いでいるが、五人はそれを無視する。

リョーコ「パイロットの方は安心なんだがな、倭は、それと比べてAIの方は」

ナテシコの補給要員である、三人編成のエステバリス隊の隊長でパーソナルカラーは赤の『昴 リョーコ（スバル・リョーコ）』は呆れ顔でヤマトを見る。

ヒカル「うんうん、悠真君は頑張ってるよ本当に、それはいいけどヤマト君は」

エステバリス隊の一人でパーソナルカラーはオレンジの『天野 ヒカル（アマノ・ヒカル）』はきこちない笑顔でヤマトの方を見る。

イズミ「パイロットをサポートするはずのAIが、足を引っ張って

る……笑えない」

エステバリスの最後の一人でパーソナルカラーが水色の『真木 イズミ（マキ・イズミ）』は、冷たい目でヤマトを見る。

ヤマト『ちくしょおー！いつもこいつも俺のことを馬鹿にしやがって！』

五人『だって、本当の事だから』

ヤマト『うわあああああ!!』

ヤマトは、泣きながら（？）スピーカーの電源を切り、倭の中へと戻っていった。

悠真「実際に、ケーブルさえ繋がってれば、様々な機器へと移動できたりする普通ではあり得ない性能なのに、そのAIがもう少し、頭を使ってくれたら……」

リョーコ「お前の機体って、パイロットとAIのシンクロ率で引き出せる能力が変わるんだっけ？じゃあ、下手したら今のまま戦場に出ても……」

ホムラ「初心者のパイロットが操縦する、旧式の機体にすら勝てないかもしれない、だが、シンクロ率さえ高ければ、コンバトラーなどに続く性能を発揮できるらしいから、俺達は、朝倉とヤマトが火星に行くまでの間に、一人前になれるように指導するしかない」

倭猛は、パイロットとAIのシンクロ率で発揮できる性能の高さが変わり、低ければ旧式以下、高ければスーパーロボット並みととても極端な差がある。

リョーコ「頑張ってるなホムラの兄貴は」

リョーコは、彼のパイロットとしての技量に憧れていて、敬意を表して兄貴と呼んでるらしいが、本人はあまり嬉しくないようだ。

ヒカル「そういえば、さっきウリピーが俺の武装があらかた完成したって言ってたなあ」

悠真「やっと、できたんですか！さすがに機関砲と太刀だけじゃ、この先生き残れませんからね、安心しましたよ」

ホムラ「これで、残された問題はヤマトだけだな、それにしても、火星は今頃どうなっているんだか……」

火星の情報は、ほとんど入ってこないために、万が一のためにもこれだけの戦力がナデシコに集められたのは、この場の人間も知っていることだ。

ホムラ「火星に着いても問題ないように、今日は俺が貴様らの練習相手になってやろう、手加減無しでいくつもりだから、全力でこい！」

リョーコ「よっしゃあ！今日こそ兄貴に一泡ふかしてやるぜ！」

その後、四人はシュミレーターで一対一でホムラに挑むも、ホムラの駆るガッツウイングに惨敗した。

実は、火星に向かっていているのはナデシコだけではなかった。

海賊船を模した巨大な宇宙船は『キングレパルド』は火星ナデシコと同じように火星へと向かっていた。

「????  
が」 「諸君、地球制の新造戦艦ナデシコも火星へ向かっているらしい

KL(キングレパルドの略)のブリッジにて艦長なして、宇宙海賊『ブラックレパルド』のキャプテンである謎の男『キャプテン・レパルド(K・レパルドと表記)はクルー達に、ナデシコが火星へ向かっていることを伝えた。

K・レパルド「火星には木製トカゲだけではなく、奴らもいる、火星には木製トカゲだけではなく、奴らがいる、我々がやることは解るな...?」

クルー一同『ナデシコに手を出す前に叩き潰す!』

K・レパルド『いい返事だ!では進め火星へ!我が同志達よ!』

クルー一同『了解!』

ナデシコの面々は知る由もなかった。

火星に現れたのは木製トカゲだけではないことを……。